

# 『三国志』東夷伝の文化環境

The Cultural Environment in the Dongyizhuan in the Sanguozhi

## 東 潮

AZUMA Ushio

- ①『三国志』東夷伝「序」の論理
- ②東夷伝諸種族の境域と東夷伝の地理観
  - ③夫餘の境域
  - ④高句麗の境域
  - ⑤濊の境域
  - ⑥韓の境域
  - ⑦倭の境域
  - ⑧東夷伝と戦争

### 【論文要旨】

『三国志』東夷伝の冒頭に、『尚書』禹貢篇や『周礼』の九服の制について明記されている。魏はそうした天下観にもとづき、公孫氏を討伐し、楽浪・帯方郡を支配した。さらに高句麗を討伐し、東海の地まで征服した。その恩恵で東夷諸国について記述でき、夷狄の国に礼のあることが知られるようになったという。東夷諸国とその都の位置関係、里程、境域を検討し、倭人伝もふくめ東夷伝が天下観にもとづき記載されていることに着目した。倭人伝は洛陽-楽浪の五千里の禹貢の五服説、帯方郡から邪馬台国までの万二千里は『周礼』の九服説による。京師からの地理観を郡治から距離観におきかえる小天下観にもとづき記述されていた。そのいっぽう東夷諸国の境域を遺跡・遺物の特徴型式の分布圏からとらえた。韓条の弁辰の「取鉄」、倭人条の「南北市糴」、「黄幢」についての解釈をあらためて提示した。倭国王都の邪馬台国の境域を想定し、そのなかに倭国王系列と在地の邪馬台国王系列の墓のあることを指摘した。魏と倭は親魏倭王の称号、金印・銀印紫綬、黄幢の授受によって、朝貢関係とともに軍事的同盟関係にあった。いわゆる魏志倭人伝を、三国・公孫氏（燕）と東夷諸国との国際関係のなかで位置づけることにあった。

【キーワード】『尚書』禹貢篇、『周礼』、境域、黄幢、魏倭軍事同盟

## ①……………『三国志』東夷伝「序」の論理

『三国志』東夷伝の冒頭につきのように記されている。

書稱「東漸于海，西被于流沙」。其九服之制，可得而言也。然荒域之外，重譯而至，非足跡車軌所及，未有知其國俗殊方者也。然荒域之外，重譯而至，非足跡車軌所及，未有知其國殊方者也。

『尚書』禹貢篇五服、『周礼』夏官職方氏の「九服之制」にもとづく天下方万里説がのべられ、「荒域之外」の諸国を服属させ、西域の諸国と同じく「總領」すべきことを説く。荒域の「蕃国」と朝貢体制にくみこむことであった。

公孫淵の父祖三代の支配により、天子が「絶域」，「海外之事」とした遼東の地を「師旅」，軍事力で討伐，「中国」化した。「楽浪，帯方之郡」を収めて，「後海（東海？）」の地域の騒ぎもおさまり，東夷は「屈服」した。

そして背反した高句麗を軍によって，「極遠」の地，東の「大海」まで追いつめ討伐したという。「四海」の東海の果てを支配した。

さいごに，諸国の名称や「法俗」，その「小大」を「區別」して記述する。夷狄の地に「俎豆之象」があり，中国で失った「禮」を「四夷」にもとめることができる。それらの国々について記し，同じちがいをあげて，史書として，はじめて「東夷」について記述しえたのであった。

本稿では，以上の東夷伝序の四つの論点にふれながら，「東夷」諸種族の境域を考古資料から検討したい。

## ②……………東夷伝諸種族の境域と東夷伝の地理観

『三国志』東夷伝諸国の境域，人口，郡治・諸国間の里程，方位などを検討する。これまで倭人伝の里程距離や方向については，邪馬台国の所在地ともからみ，問題にされてきている。東夷伝における漢魏晋の郡県と諸国との位置関係，距離についてふれよう。

夫餘 在長城之北，去玄菟千里，南與高句麗，東與挹婁，西與鮮卑接，北有弱水，方二千里。戸八萬。…諸加別主四出道。大者主數千家。小者數百家。

高句麗 在遼東之東千里，南與朝鮮，濊貊，東與沃沮。北與夫餘接。都於丸都之下，方可二千里，戸三萬。

東沃沮 在高句麗蓋馬大山之東，濱大海而居。其地形東北狹，西南長，可千里，北與挹婁，夫餘，南與濊貊接。戸五千。北沃沮一名置溝樓，去南沃沮八百餘里，其俗南北皆同，與挹婁接。

挹婁 在夫餘東北千餘里，濱大海，南與北沃沮接，未知其北所極。

濊 南與辰韓，北與高句麗，沃沮接，東窮大海，今朝鮮之東皆其地也。戸二萬。

韓 在帯方之南，東西以海為限，南與倭接，方可四千里。有三種，一曰馬韓，二曰辰韓，三曰弁韓，古之辰國也。…大國萬餘家，小國數千家，總十餘萬戸。辰王治月支國。…

- 辰韓 在馬韓之東，…馬韓割其東界地與之。…始有六國，稍分為十二國。
- 弁辰 亦十二國，又有諸小別邑，…弁，辰韓合十二國，大國四五千家，小國六七百家，總四五萬戶。其十二國屬辰王。
- 弁辰 與辰韓雜居，亦有城郭。…其瀆盧國與倭接界。
- 倭 倭人在東南大海之中…從郡至倭，…到其北岸狗耶韓國，七千餘里，始度一海，千餘里至對島國…方四百餘里…有千餘戶…又南渡一海千餘里…至一大國，…方可三百里，…三千許家，…又海一海，千餘里至末盧國，有四千餘戶…東南陸行五百里，到伊都國，…有千餘戶…東南至奴國百里，…有二萬餘戶。東行至不彌國百里，…有千餘家。南至投馬國，水行二十日，…可五萬餘戶。南至邪馬壹國，女王之所都，水行十日，陸行一月。…可七萬餘戶。…自郡至女王國萬二千餘里。…當在會稽，東治之東。…女王國東渡海千餘里，復有國，皆倭種。又有侏儒國在東南人長三四尺，去女王四千餘里。又有裸國，黑齒國在東南，船行一年可至。參間倭地，絕在海中洲島之上，或絕或連，周旋可五千餘里。
- 遼東郡 屬幽州。戶五萬五千九百七十二，口二十七萬二千五百三十九。縣十八（『漢書』地理志）。
- 雒陽東北三千六百里，十一城，戶六萬四千一百五十八。口八萬一千七百一十四（『後漢書』郡国志）。
- 玄菟郡 屬幽州。戶四萬五千六，口二十二萬一千八百四十五，縣三（『漢書』地理志）。
- 雒陽東北四千里，六城，戶一千五百九十四。口四萬三千一百六十三（『後漢書』郡国志）。三縣，三千二百戶（『晉書』地理志）。
- 樂浪郡 屬幽州。戶六萬二千八百十二，口四十萬六千七百四十八。縣二十五（『漢書』地理志）。
- 雒陽東北五千里，十八城，六萬一千四百九十二戶，二十五萬七千五十人（『後漢書』郡国志）。
- 六縣，三千七百戶（『晉書』地理志）。
- 帶方郡 七縣，戶四千九百（『晉書』地理志）。

**郡治と王都** 東夷伝の里程を具体的に歴史空間のなかで考察するために，郡治，諸種族の都城の所在地の比定が前提条件となる。比定にいたる研究史は省略して，結論だけをのべる。

漢魏の樂浪郡治は平壤，帶方郡治は黄海南道鳳山郡，遼東郡治は遼陽に置かれた。玄菟郡治は，第1次が咸鏡南道咸興付近（紀元前107年），第2次が遼寧省新賓（紀元前75年）で永陵鎮の土城，第3次が撫順の労働公園あたりかその西の瀋陽小伯屯と推定される。

高句麗の王都は，3世紀になると，国内城（吉林省集安）に移っていた。

夫餘の王都は，吉林市龍潭山，東团山・南城子土城一帯に比定される〔李建才1982，武国助1983，田中俊明1995〕。

挹婁の境域は松花江・牡丹江からウスリー江流域で，その中心は黒龍江省佳木斯市の滾兔嶺土城や鳳林土城一帯とみられる。

韓の王都は，三韓の王として実在した辰王の居城，月支国である。忠清北道天原・礼山地域と推定される〔武田幸男1997〕。3世紀前半代，月支国は馬韓諸国の大国の一で，3世紀後半以降には漢

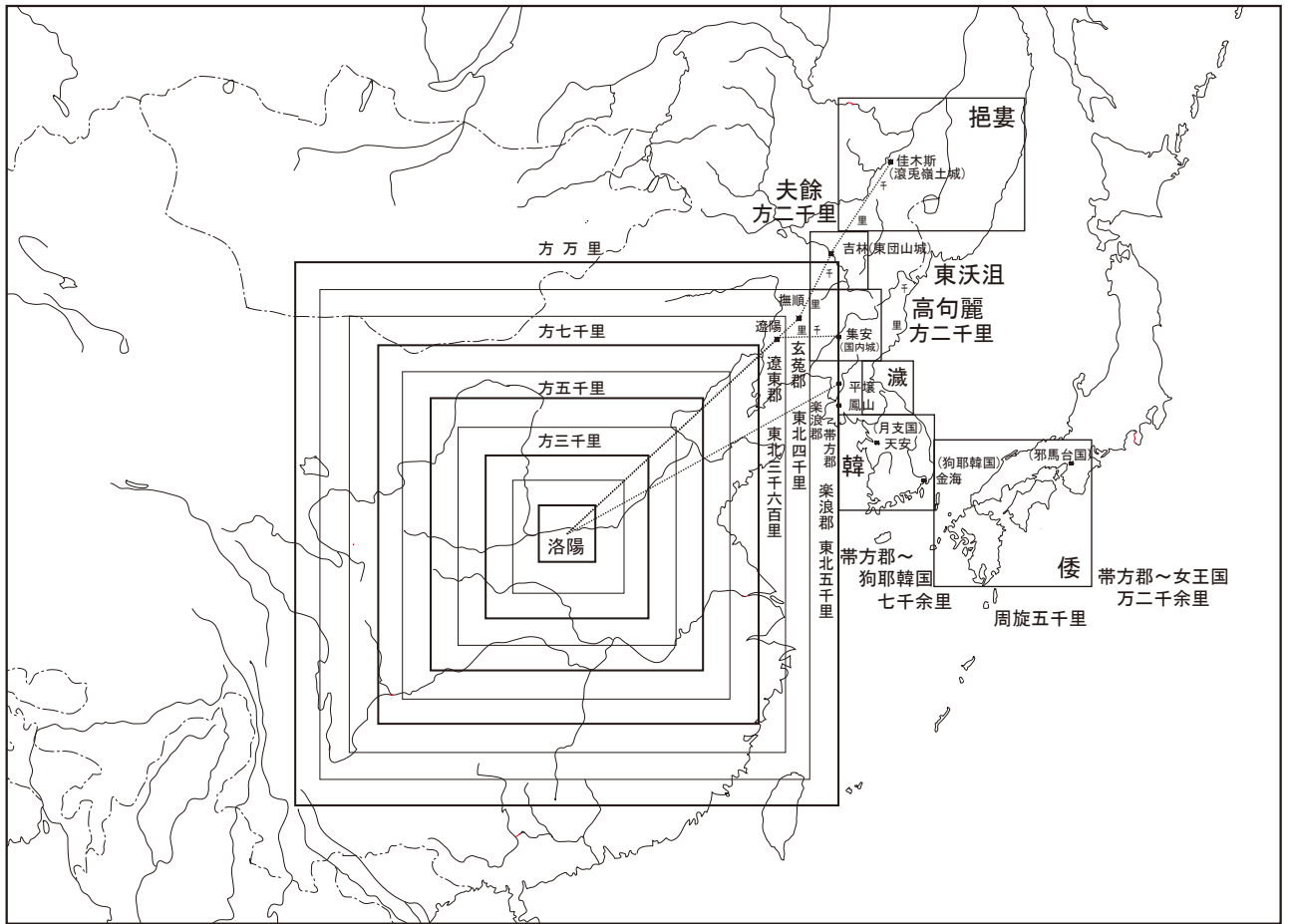
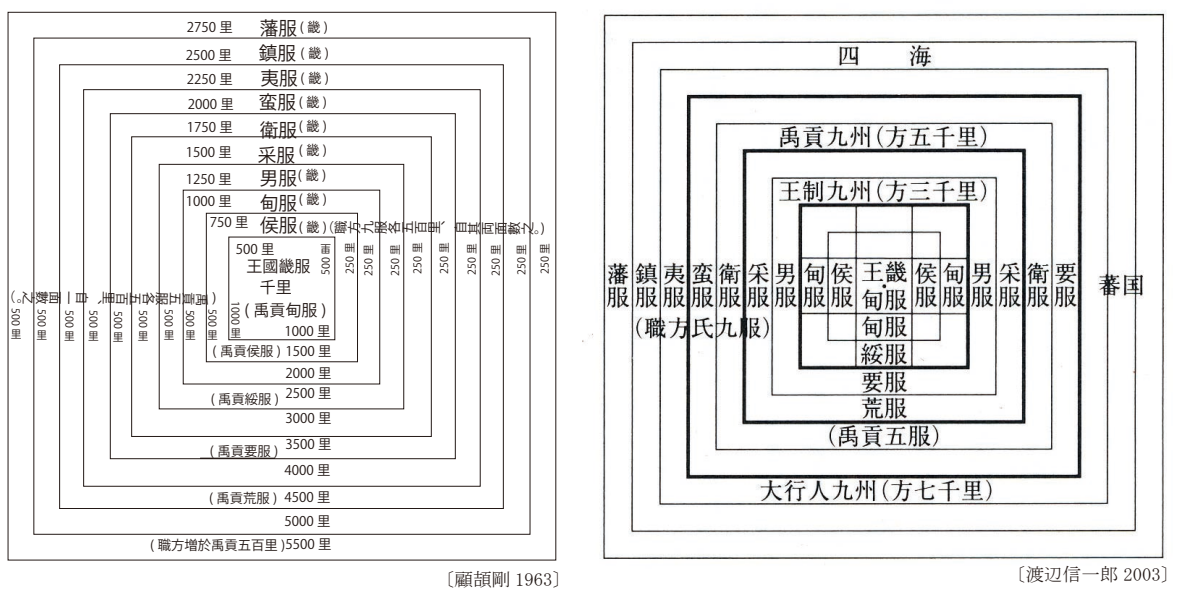


図1 東夷伝の里程



[顧頡剛 1963]

[渡辺信一郎 2003]

図2 天下四海図



江流域のソウル風納洞土城が伯濟国の中心であった。

以上の文献と、考古資料にもとづき想定した境域を「方」につくり、現在の地図も用いて図示した(図1)。作図法は洛陽を中心に東に平壤(楽浪郡)を通る南北線を「五千里」と仮定し、東西南北を「方万里」につくった。当時の方位とずれを生じている。

これらの郡治と王都までの「千里」の地図上の直線距離についてみる。郡治と都城をむすぶ距離である。魏代の尺度は、甘肅省嘉峪関新城2号骨尺(『中国度量衡図集』)によると、1尺23.8cm、1歩=6歩、1里=300歩で、1里は4284mとなる。千里は428kmとなる。

洛陽(洛陽城)→平壤(楽浪郡治) 1281km (64°), 五千里(2140km)

洛陽(洛陽城)→鳳山(帯方郡治) 1271km (67°)

洛陽(洛陽城)→遼陽(遼東郡治) 1193km (49°), 三千六百里(1540.8km)

洛陽(洛陽城)→撫順(玄菟郡治) 1285km (234°), 四千里(1712km)

遼陽(遼東郡治)→集安(国内城) 250km (92°)

遼陽(遼東郡治)→桓仁(卒本) 180km (89°)

遼陽(遼東郡治)→平壤(楽浪郡治) 330km (138°)

撫順(玄菟郡治)→吉林(夫餘東团山城) 320km (44°)

吉林(夫餘東团山城)→佳木斯(挹婁滾兔嶺土城) 480km (46°)

撫順→吉林→佳木斯 800km (44~46°)

東团山→中興土城・黒龍江 600km (43°)

鳳山(帯方郡治)→天安(月支国) 220km (148°)

鳳山(帯方郡治)→金海(狗耶韓国) 450km (142°)

**東夷伝の里程** 東夷伝諸国は『尚書』兎貢五服説、『周礼』の「九服之制」の思想にもとづき記述されている。九服之制について「中国では、夏・殷時代に王畿の外の服区族属地域を五服としていたが、周公はこれを九服に改めた。『周礼』夏官・職方氏によれば、王都の千里四方を王畿とし、その周囲五〇〇里ごとに区画し、侯服・甸服・男服・采服・衛服・蛮服・夷服・鎮服・藩服としてゐる」[江畑武・井上秀雄1974]。

方万里の九州と四海(中国と夷狄)からなる天下観にもとづく『周礼』・『尚書』の認識で、九州の外の蕃国は、職方氏の夷服・鎮服・藩服にあたる、東夷・北狄・西戎・南蛮からなる夷狄の領域である[渡辺信一郎2003]。

楽浪郡は洛陽から「五千里」である。まさに天下(中国)思想、方万里の東界である。『周礼』の天下観にもとづいたものだ。このように『三国志』東夷伝の里程、地理観は『禹貢』・『周礼』などの「天下観念」にもとづいていた。東夷伝じたいの序に記されていることじたいが根拠となりうる。

楽浪・遼東・玄菟郡は、『漢書』によると幽州に属する。『後漢書』によると、遼東郡は洛陽の東北三千六百里、玄菟郡は洛陽東北四千里、楽浪郡は洛陽東北五千里とある。遼東郡と楽浪郡とは千四百里、遼東郡と玄菟郡とは四百里の距離感覚である。遼東郡から高句麗まで千里であるから、それより遠く認識している。遼東郡から約2倍、二千里相当である。

東夷伝にみえる「千里」と比較すると、遼東郡治や玄菟郡治から高句麗、夫餘、さらに挹婁と、「千里」の距離数は長くなっている。挹婁の北は不明だという。「千里」単位に諸国の位置や広さが記

されている。夫餘は「方二千里」、高句麗は「方可二千里」、東沃沮は「可千里」、韓は「方可四千里」である。「可」の有無は魏との政治的関係を表現している。

遼東郡（遼陽）から高句麗国内城まで「千里」、玄菟郡（撫順）から夫餘王都（吉林東団山城）までの「千里」は今日の地図上の直線距離と比較するとかなりの隔りがある。

かりに遼東郡治から国内城まで「千里」を単位に方二千里の高句麗の境域をえがくと、東西南北とも広大な地域となる。夫餘の境域や東海を包含する。また玄菟郡から夫餘東団山城の「千里」による方二千里は西南の玄菟郡や南の高句麗や北の挹婁の境域と重なりあう。夫餘・高句麗は方二千里であるので、それぞれの千里観で、復原すると夫餘の疆域が大きくなる。人口比でみると、夫餘が八万戸、高句麗が三万戸であるので、面積と相対的に対応する。夫餘の方二千里の境域は高句麗より広い。

挹婁は漢いらい夫餘に従属していたが、黄初年間に叛いた。夫餘はしばしば挹婁を伐ったという。挹婁の言語は扶餘や高句麗と同じでないという。扶餘の八万戸には挹婁との接触地帯の戸数もふくまれていたのであろう。扶餘と挹婁は松花江流域にひろがった。

東夷伝の里程の距離には道のりも、「千里」との関係をもみても、当時の尺度にもとづく実長でないといえるだろう。しかし遼東郡治・国内城間の250km、玄菟郡治・夫餘間の320kmの「千里」はけっして荒唐無稽の距離の差でない。古代の地理認識としては的確とさえいえる。当時、戦争によって、軍事的地政学は発達していた。景初2年(238)の遼東、公孫淵討伐にさいして、明帝は「往還幾日？」と問い、司馬宣王は「往百日、攻百日、還百日、以六十日為休息、如此、一年足矣」と答えている。遼河から遼東郡治まで、「歩騎數萬、道路迴阻、四千餘里」の距離で、戦略がねられたのであった。

韓は「方可四千里」で、馬韓・弁韓・辰韓をふくむ。遼東郡・国内城の「千里」は直線で約250km、鳳山（帶方郡治）→天安（月支国）220km、鳳山→金海（狗耶国）450kmで、直線距離でおおよそ2倍である。帶方郡治から月支国まで「千里」、帶方郡から狗耶韓国まで「二千里」にあたり、方二千里といえるが、「方四千里」とされる。面積で約4倍である。帶方郡から狗耶韓国までは水行で、西海岸を四千里、南海岸を三千里の七千里と解釈されている〔江畑1960〕。あくまで方四千里と意識されていた。西海岸が四千里で、南海岸が三千里というわけでない。

韓の東西は海であった（「東西以海為限」）。方四千里で、帶方郡治（黄海南道鳳山郡）から南に四千里、さらに東（南）に三千里の七千里で狗耶韓国、倭の北岸に到る。四千里四方の東南角が狗耶韓国であり、倭の北岸と意識されていた。

洛陽から樂浪郡まで「五千里」、帶方郡から狗耶韓国まで「七千里」、邪馬台国まで一万二千里、倭の邪馬台国まで「周旋五千里」である。

帶方郡から弁韓の狗耶韓国までの「七千里」は六服の方七千里、倭の邪馬台国までの「萬二千里」は、七千里に禹貢九州の方五千里、「周旋五千里」をあわせた数とかがえられる。『周礼』にいう蛮服の世界である。「周旋五千余里」は「方五千里」に相当するといわれる。狗耶韓国から奴国まで三千六百里で、邪馬台国までの「水行十日陸行一月」で千四百里を往くという。

山田孝雄〔1922〕によると、周旋は自ら回転して行動する義で、物の大きさをいう語でなく、紆余屈曲五千余里に連互するというような意味である。「郡より狗耶韓国に至るまでの七千里とこの倭地の周旋五千里と合せて、郡より女王国に至る万二千余里の里数と相一致するに於ては、たとへ

その里程の単位は疑問なりとすとも、かの筆者の胸中に合理的の推算を下したるものにして、之を顧みずして、誤算なり虚偽なりなどの論を公表するの士は須らく三省を要すべきなり」という。倭の北岸の狗耶韓国から邪馬台国までの距離である。帯方郡からの邪馬台国の一万二千里からいけば、狗奴国は邪馬台国の「南」にあった。

狗耶韓国から伊都国まで三千五百里、投馬国まで水行二十日、邪馬台国までの水行十日・陸行一月と記す。榎一雄によると、陸行一月、歩三十日は日に五十里（『唐六典』）として千五百里で、帯方郡から邪馬台国の一万二千里と一致する〔佐伯有清 1972〕。「周旋」の意味あいから、韓の界である狗耶韓国から邪馬台国までは五千里と認識していた。

投馬国（岡山平野）まで水行二十日、そこから邪馬台国（奈良盆地・大阪平野）の西の境界域の大阪湾まで水行十日、陸行一月で奈良盆地の宮都（纏向遺跡）までという意味で解釈する。大阪平野から奈良盆地までの「一月」は陳寿の認識、天下思想にもとづく観念上の地理観である。塞曹掾史張政はじっさい邪馬台国へ行き、難升米に詔書・黄幢が拜仮されている。ところが張政の実地の見聞録は地理観に反映されていない。編纂の意図がべつのところにあるからである。

以上のように東夷伝の里程について着想したが、禹貢説との関係については、すでに松本清張が『古代史疑』のなかで展開している〔松本清張 1968〕。

- ・里数の記載も「玄菟を去る千里」「方二千里可」「遼東の東千里」「方二千里可」「西南に長く、千里可」「夫余の東北千余里」というように、いずれも二千里、千里単位の同数である。
- ・倭人伝の狗耶韓国から対馬国まで、対馬国から一支国まで、一支国から末盧国までのそれぞれの距離をすべて「千余里」で片づけたと同じ筆法である。
- ・「東夷伝」記載の里数も虚数なら「倭人伝」の里数も虚数である。
- ・狗耶韓国から不弥国までの里数は五百里をもって基準とし、狗耶韓国から対馬国までの千里は、だいたい、末盧・伊都間の五百里の倍と考えて千里としたようだ。対馬・一支間、一支・末盧間の各千里も同じ五百里をもってした基準である。
- ・五百里をもって基準とした理由は、中国上代にできた「五服・九服」の制度にみられる王畿を中心とした区域の距離五百里に拠った。

松本清張〔1968〕は、邪馬台国・筑後国山門郡説で、「倭人伝」の方向記事は古代航海者の感覚をもとにしているから信憑性がある。「里程や戸数は虚妄の数字」という。「3世紀の末にこれを書いた陳寿という一人の中国歴史家の観念を凝視しなければならない」と指摘する。さらに禹貢説について、再論している〔松本・鈴木武樹 1975〕。「里数・日数が陰陽五行説からでている机上の数字で、陳寿の創作」で、「いわゆる蛮夷朝貢国の距離はほとんどといっていいくらい長安から一万二千里」で、「陳寿が〈倭人伝〉を書いたとき、この『漢書』の書例にならって「郡より女王国」まで万二千里とした。「洛陽より女王国まで」としないで、「郡より」としたところに大きな意味がある。禹貢の説にもとづき、「帝王は方千里、それを中心にして方一千里までは服属地だが、方一千里以遠は非服属の野蛮の地という意味で、「万二千里」はこの非服属地にあたる。

以上のように松本清張は、東夷伝の禹貢説に着目するが、「『魏志』「倭人伝」の里数、日数はまことにナンセンスなものである」と結論づけた。私は禹貢説にもとづく、陳寿の論理、魏の国際的政治的利害関係の論理が重要であるとかんがえている。西晋で統一された天下思想による。西晋期

に編纂された史書である。里数が実数・虚数であるか否かはさして問題ではない。また松本は東夷伝の諸国や鮮卑伝の習俗などにふれている。烏桓鮮卑東夷伝を読むなかで、東アジア的視座で、倭人伝をとらえている。松本清張の論は「水行陸行」などととも、邪馬台国研究史上に位置づけられている〔佐伯有清 1972〕。

### ③……………夫餘の境域

夫餘。在長城之北。去玄菟千里。南與高句麗。東與挹婁。西與鮮卑接。北有弱水。方可二千里。戸八萬。其民土着。有宮室倉庫牢獄。多山陵廣澤。於東夷之城最平敞。土地宜五穀。不生五果。…國有君主。皆以六畜名官。有馬加・牛加・豬加・狗加・大使・大使者・使者。邑落有豪民。民下戸。皆為奴僕。諸加別主四出道。大者主數千家。小者數百家。食飲皆用俎豆，會同，拜爵，洗爵，揖讓昇升降。…其國善養牲。出名馬，赤玉，豹狽，美珠。珠大者如酸棗。以弓矢刀矛為兵。家家自有鎧仗。…作城柵皆員。有似牢獄。…有軍事亦祭天，殺牛觀蹄以占吉凶，合者為吉。…其死，夏月皆用冰。殺人徇葬，多者百數。厚葬，有槨無棺。……舊夫餘俗，水旱不調，五穀不熟，歸咎於王，或言當殺。…漢時，夫餘王葬用玉匣，常豫以付玄菟郡，王死則迎取以葬。公孫淵伏誅，玄菟庫猶有玉匣一具。今夫餘庫有玉璧，珪，瓚數代之物，傳世以為寶，耆老言先代之所賜也。其印文言「濊王之印」，國有故城名濊城，蓋本濊貊之地，而夫餘王其中，自謂「亡人」，抑有也（『三国志』魏書東夷傳夫餘）。

### 夫餘の王都と境域

夫餘は玄菟郡から「千里」にあり、南は高句麗、東は挹婁、西は鮮卑と境界を接していた。北に「弱水」がある。この「弱水」は今の松花江と推定される。夫餘は東団山城（吉林市）を王都として、松花江流域に独自の文化が形成した。夫餘の境域内で、それぞれ「四出道」をつかさどり、「數千家」や「數百家」をつかさどる諸加が存在した。夫餘の諸遺跡（集落・墓葬）はつぎの諸地域に分布する。

松花江中流域（吉林東団山土城，吉林帽兒山墓群，吉林江北土城子，吉林泡子沿前山，永吉学古，永吉学古東山，永吉大海猛）

松花江・拉林河流域（吉林省榆樹老河深墓群，大坡公社后崗村，榆樹十八盤）〈北・東北道〉

松花江・伊通河流域（農安函營，農安田家屯柁子）

松花江流域通榆（興隆）

松花江・揮發河・横道河流域（東豊県大架山，東遼石驛・彩嵐北山墓群）〈西・西南道〉

遼河・冠河流域（遼寧省西豊県西岔溝墓群）

**松花江中流域—吉林—** 王都から四方に通ずる、「四出道」は道のみならず、地域空間をあらわす。王都の東団山城を中心に東方の敦化方面、さらには牡丹江流域の挹婁の地、西北方は松花江下流の榆樹、徳恵、西は農安に至る。西南は松花江を遡上し、東豊や東遼、玄菟郡への道で、山を越え、英額門、分水嶺を越え、撫順の玄菟郡に至る。南は松花江を遡上し、樺甸から撫順、渾江をくだって通化に至る道。「四出道」は方二千里に思想にもとづく空間概念でもあり、夫餘の挹婁、高句麗、鮮卑、玄菟郡との交通関係をもしめず。このように「四出道」は夫餘の都から四方に通ずる道路と



近辺邑落を意味し、挹婁など異種族の諸邑落にまで通じる道路が存在した〔武田幸男 1967〕。

東団山城（図3）は、吉林市街をながれる松花江東岸に位置する〔董学増 1982〕。楕円形の山丘で、地形にそって城牆（周壕・土塁）が三重にめぐる。下段の城牆の内側は壕状になり、山麓から松花江沿いに圍繞する。下段（第1段）の城牆（外城）は長径 265～295m、短径 160m、周長約 730 m。

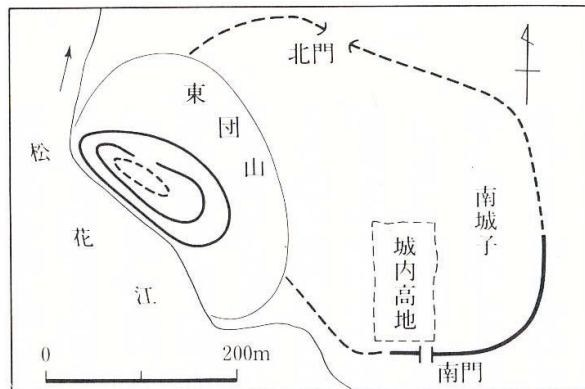


図3 吉林東団山城

山麓台地の長径は約 400 m、短径約 200 m、東西長径 230m、南北短径 115m、高さ 10m、中段（中城）は長径 170m、短径 62m、高さ 12m、上段（内城）は長径約 85m、短径約 12～15m。上段と中段の距離は 53.5m、中段と下段は 35.2m と計測されている。東団山の東に「南城子」とよばれる城牆がとりつく。いわば東団山を内城とすると、外城にあたる。南城子外城の長径（最長）は約 700 m、短径は 180～200 m、外城と第 1 段城牆の距離は東西約 550 m、南北約 350 m である。南北に門址がつくられ、南門が幅 16m、北門幅は 44m という。その城牆がとぎれたところが門址と推定されている。門址じたいの痕跡は確認されていない。城内は畑地で、中央部南寄りに南北 150m、東西幅 73m の微高地があり、宮殿址と推定されている。東南部の城牆は高さ 5～6m、幅 1m がのこる。外側に「護城河」の痕跡をとどめる。現在、南辺の一部と東南部に城牆が遺存する。東辺は削平されているが、段差があり、城牆の痕跡とみられる。北辺は民家が建てられている。漢代併行期の瓦、陶器、鈴形銅飾、高句麗、遼金代の遺物も出土している。東団山と南城子城牆（土城）は一体の構造の城郭である。高句麗や渤海の遺物もみつき、その時期に城壁が修復利用されたことがわかる。北 2.5km に高句麗の龍潭山城があり、東団山城を龍潭山城の衛城とみる見解もある〔董学増 1982〕。

夫餘伝に「作城柵皆員」とあり、円形の「城柵」があったことが記されている。東団山城をめぐる土城（土塁）である。城牆には木柵がめぐらされたのであろう。東団山と南城子土城は一体のもので、南城子城牆を夫餘の「円柵」とみる〔武国助 1982〕。近辺の南山山城や敦化県城山子山城に楕円形の城牆（土城）が築かれている。いずれも土城と壕状の痕跡がある。のちの高句麗や渤海時代にも利用されている。

東団山城柵は、挹婁の滾兔嶺土城や鳳林山城、弁韓の金海鳳凰台土城（金海貝塚）、梁山貝塚、倭の高地性集落と一脈つうずる。梁山貝塚は高地性集落と共通する。

東団山周辺に帽兒山墳墓群が造られている〔吉林市博物館 1988〕。吉林市街地を流れる松花江の東岸の帽兒山西辺の台地上に立地する。西に東団山、北に龍潭山、南に亀蓋山が位置する。1980 年に 3 基の墓葬が発掘された。M1 は土壙木槨墓。地表面から 3.5 m の深さの墓壙内に 3 個の槨室が設けられる。中槨は長さ 3.5 m、幅 1.4 m、高さ 0.9 m で、北槨は 2.8 × 0.9 × 0.5 m、南槨は 2.4 × 0.8 × 0.6 m で、中槨が最大で、南槨と北槨が小さい。角材、板材をくみあわせてつくる。槨内に木棺の痕跡はないという。M2 は隅丸長方形の土壙木槨墓。残長 3.7 m、幅 2.2 m、高さ 1.6 m。槨内に木棺はない。槨に彩絵がある。槨内で漆器と鉄器が出土。M3 は長さ 3.5 m、幅 2.0 m、深さ 2.8

mの墓壙をうがち、長さ3.1m、幅2.0、高さ0.6mの角材組みあわせの木槨をつくる。木棺はない。瑪瑙珠、白樺製の皿がみついている。発掘地点の周囲で、瑪瑙珠、五銖銭4枚、貨銭1枚、高杯片が採集されている。

1989～1990年に帽兒山Ⅳ・Ⅴ区とその南の亀蓋山Ⅳ区で57基が発掘された〔劉景文1991〕。鏃頭鉄刀、銅鏡、銅馬鐮、鉄馬銜などが出土。亀蓋山の一壙三槨墓は1980年発掘のM1と類似する。この三槨・三体埋葬は老河深墓にもみられる。1988年以來の試掘で、帽兒山Ⅰ区15号木槨墓が確認された。ほかに漆器、銅鏡、金牌飾、銅車轄、青銅人頭形飾が発掘されている〔『中国文物地図集吉林分冊』1993〕。また龍潭山車站から東団山にかけての鉄道の両側で五銖銭、銅鏡、銅鏃、耳飾、漢瓦当、陶器などの遺物が発見されていた〔李文信1946〕。1982年に東団山の南麓で、漢代の陶俑も出土している〔麗明1986〕。

江北土城子遺跡〔吉林省博物館1957〕は、吉林市街の東団山城の北、松花江の北岸の丘陵上にある。住居跡、灰坑群、石棺墓群から石器、土器、骨鏃、骨刀、青銅刀1、青銅鏃4、連珠状銅飾物14、瑪瑙玉2、白石管60、翡翠墜、鉄鏃1などが出土している〔康家興1955〕。その北側に泡子沿前山遺跡〔吉林市博物館1985〕がある。夫餘の前段階の西団山文化期の住居跡群や石棺群が立地する。住居跡の上層で鉄鏃1と鉄鏃1が出土している。このほか吉林市周辺には兩半山（劍把頭部）、碾磨山（鑄造鉄斧）、吉林馬家屯、小石橋屯（鉄矛・五銖銭）、小秀山、官地など夫餘の遺跡が密集して分布する。兩半山遺跡は西団山文化期が中心で、老河深墓と同じ銅柄鉄劍が出土している。

吉林市の東北、永吉一帯に集落、墓群が存在した。学古東山遺跡〔董学増・陳家槐1981〕は松花江の支流の張老河沿いの丘陵上にある。下層は西団山文化期で、長方形半竪穴住居跡で石刀・石鏃・石斧・砥石・環状石器、土器が出土している。中層の灰坑から、鉄製農工具（鏃、鏃、鏃、鏃、鏃）と武器（矛）、土器（高杯・壺）が出土した。学古墓葬〔尹玉山1985〕は張老河の南岸の西南約500mの東西方向の丘陵上で立地する。長さ2.2、幅1.3mの長形状木棺墓で、人骨から夫婦合葬墓と推定されている。金指輪、瑪瑙玉、銅製品（鏃・釜・帶鉤・昭明鏡・扣）、鉄製品（刀・矛・鏃）などが出土している。老河深墳墓の青銅遺物と類似する。楊屯大海猛遺跡は西団山文化期から夫餘、渤海期にわたっている〔吉林市博物館1987〕。

**松花江・拉林河流域—榆樹—** 榆樹老河深墓群〔張英・王俠・何明1985〕は吉林市北部、松花江の東に位置する。さらに北数10kmに黒龍江省との省境があり、哈爾濱に至る。下層で、西団山文化期の竪穴住居2棟、中層は前漢末から後漢初で、129基の木棺墓、上層で渤海期の37基石棺墓・木棺墓が発掘されている（図4）。中層の129基から4200余点の副葬品が出土。周囲の立地条件をみるかぎり、墓群はひろがるのであろう。近辺の微高地上に集落が立地するが、墓群の造営集団の集落もそこに存在したのであろう。

単人葬、男女同穴合葬、男女異穴合葬、一男二女異穴合葬がある。頭向が東向き（75～97°）が23基、西向き（265～275°）が106基と西向きが多い。男女異穴合葬は男は右、女は左。男性墓は女性墓より長く、大きい。一男二女異穴合葬墓は男性が中で、女性墓は両側に配置される。

木棺に火焼の痕跡がある。埋葬時に墓壙内で焼いたあと、土を埋めたという。人骨と副葬品に火焼の痕跡はない。24基の墓で炭化物がみつかったが、埋葬時に墓壙外で焼かれたのちに埋葬された。男女同穴合葬・男女異穴合葬の男性墓は武器、女性墓は簡単な生産道具と銅腕飾が副葬される。遺



骸の胸部で身に直交して鏝頭刀と鏝頭錐が置かれる例が20基で確認された。埋葬規範があった。また18基で遺骸の頭部で破碎した瑪瑙珠がおかれている。珠玉をこわす風習があったようだ。

12基の埋土中で馬骨（臼齒）が出土。M20では3列に48片の馬歯が並べられていた。墓地の中心で馬頭骨の埋葬坑があり、馬葬祭祀がおこなわれたことをしめす。

楡樹十八盤遺跡は老河深遺跡の西北約30km、第2松花江北岸の楡樹五果樹鎮の平地に位置する。このほか楡樹県には、大坡公社后崗村、福安郷小紫樹林、大崗郷張家窩堡、五果樹村の東の劉家郷馬喜屯などで漢代併行期の土器が出土している。

**老河深墓群の構造** 四墓群に大別、七墓群に細別できる。墓群の副葬遺物の組み合わせは、鉄剣、金銅牌、耳飾と指輪の材質（金銀銅）、

武器（刀・矛）、農工具、砥石、瑪瑙珠を指標として分類した。A～E墓群のなかで、副葬品の組み合わせに差異がある。A・B墓群とC群・E群とに格差がみられる。

鉄剣を保有する56（A）・105（A）・2（C）・103（A）・41（A）・115号墓（B）は金銅牌や金製耳飾、漢系の銅鏡と曲棒形帯鉤をもつ。この墓群のなかで最高首長の墓である。夫餘伝にみえる「豪民」の墓にちがいない（表1）。金銅牌・金製耳飾と鉄製農工具をもつ11・124（123）・97・33・98号墓も上位階層の墓である。A・B群では有力家族を中心に2世代以上の墓がいとまれている。

56号墓で漢系の中原様式の有格木柄鉄剣と在地の金銅神獸牌飾2・金銅鹿文牌飾5・金銅卷曲文牌飾2・金耳飾2、瑪瑙玉78が出土。鉄剣は長さ95.8（4尺）で木質劍鞘、紅黒の漆皮の痕跡がある。曲棒形帯鉤と銅鏡も伴出し、漢・玄菟郡と関係のあることをしめす。

6・9・11・56・57・58・67・97・123号墓で甲冑が出土。夫餘の兵器として弓矢・刀・矛、家々に鎧と仗（兵器）があるという。階層差があり、甲冑の副葬は限られている。矛は13基、鉄鍬は44基で副葬されている。女性墓を考慮すると半数で武器が副葬され、その保有率は高い。革製の鎧もあったとすれば、夫餘伝の記載のとおりである。56・67号墓の甲冑は「玉匣」（玉衣）を彷彿させる。武器（刀・鏝頭刀・鍬）と農工具を主体として副葬する一群がある（M17・30・82・107など）。一つの階層がつくられている。鏝頭刀をもつ階層も存在する。

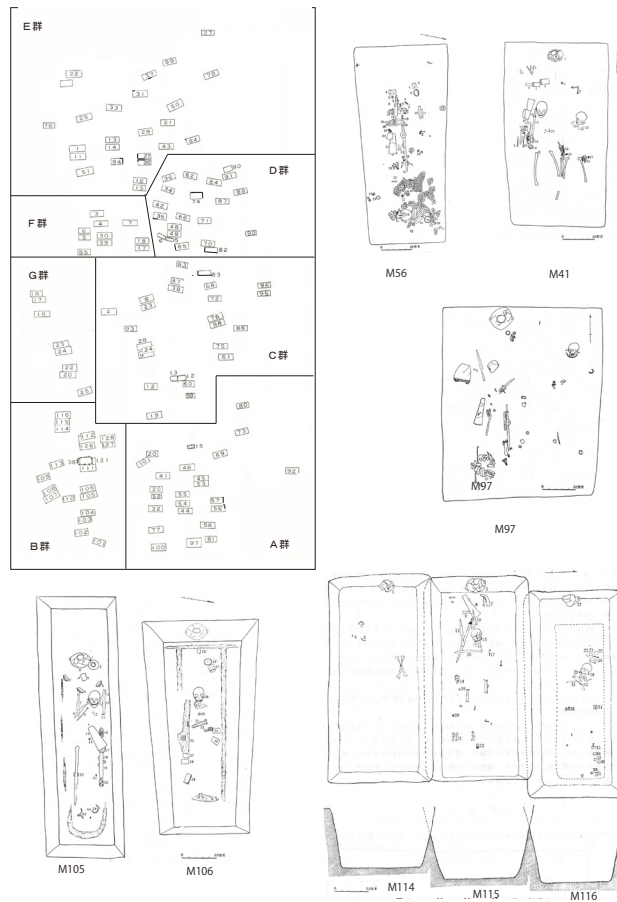


図4 楡樹老河深墓群

表1 夫餘の官位

	君主	馬加	牛加	猪加	狗加	大使	大使者	使者	
邑落	豪民								下戸
諸邑落	宮都	数 千家			数 百家				

瑪瑙珠は129基の墓葬のうち、大半の80基で副葬されていた。出土個数は269個（M1）から2個とばらつきがある。用途に関係するが、2個から数個という例は玉自体が単体で副葬されたことをしめす。出土量は階層によって差異がある。瑪瑙珠を主体に出土する墓が10数基ある。夫餘の特産品として、「赤玉」があげられているが、それは赤瑪瑙のここのようだ。女性墓をとわず赤玉（瑪瑙）が好まれていた。瑪瑙玉は吉林江北土城子、学古村、西豊西岔溝墓葬などで副葬されている。

夫餘の「君主」の墓は王都の東団山周辺に造営された。六畜の官の馬加・牛加・猪加・狗加・大使・大使者・使者からなる、王都を中心に身分制度、階級社会が形成されていた。邑落は豪民と一般邑落民の下戸による階層からなりたっていた〔武田幸男1967〕。諸加は王都を中心として、「四出道」に沿う諸邑落社会があり、諸加が支配していた。数千家や数百家を治める諸加勢力であった。夫餘は方二千里で八万戸とある。実数はともかく、松花江流域のいくつかの分布地域に数千家単位の大邑落、数百家単位の小邑落が存在したのであろう。数千家の邑落は国邑といえる。

老河深墓群は、数千家からなる諸邑落（国邑）の中心勢力の墓群であろう。邑落は豪民と一般邑落民の下戸層からなり、墓群に邑落の階層構造が表象されている。有力家族（諸加層）をふくむ諸邑落の共同墓地が形成されている。

老河深56・105・103号墓などは副葬遺物からみて、榆樹の邑落に居住する。その地域の諸邑落（邑落）をつかさどる諸加層、豪民であったと推定しえる。老河深墓群で、副葬品のくみあわせから、いくつかの墓群（A～G）にわけられ、1墓群内でも差異がある（表2・6）。「六畜」のなかでもっ

表2 老河深墓群の副葬品の組み合わせ

	劍+金銅牌	金銅牌+金耳飾 +金指輪	金・銀耳飾+銀指輪 +金・銀・銅指輪	銀耳飾+	銀指輪+	銅指輪	刀・農工具	銀頭刀+	瑪瑙	
A	56(鏡), 41	97(鏡・鏡)	54(鉤), 67(鏡)	102, 57, 55, 120, 32, 77	58, 92		10, 53, 18, 81	52, 44, 46,	45	
B	105, 103, 115	124(123)		113,13,110, 116, 106,127, 27,128, 111	104,125	122	109,11 2,101	119,107, 121	126	108,114
C	2(帶鉤)			93, 75	76		7, 4, 47	86, 72, 23	60, 8	73, 83, 88, 28, 61, 59, 95
D	-	98		74, 66(帶鉤), 65		25	84	63, 64, 3 6, 42, 71, 34, 82	48, 49, 89	70
E	-	11, 33		94,1,15	14	78	29	99	26	21,37,31,79
F	-						6	30, 39, 85		3
G								19, 20	22	

とも重要視された家畜は馬で、馬が殉葬された。馬骨は M1・5・10・20・22・25・70・107・108・109・120・129 の 12 基で確認されているが、副葬遺物の少ない大墓に多い。牛は卜占（牛蹄卜骨）に用いられ、神聖な動物として意識されている。牛犂は未発見。犬も家畜である。

**松花江・伊通河流域—農安—** 農安函苞遺跡は農安の東北、松花江南岸の青山口郷に位置する老河深から 80km の松花江の下流側にあたり、江に面する河岸段丘上に立地し、大量の土器、石器が出土している。東団山出土の土器に類似するものもあるという。

田家屯柁子〔王業洲ほか 1958〕は農安の西北、松花江の南岸の台地上にある。集落跡で、土器・石器・銅器（銅鏃）とともに、鉄斧が出土している。農安付近は夫餘建都の所在地ととらえる見解がある。その後の報告では、遺跡の年代は漢書 2 期文化かくだる時期であるが、田家屯柁子は漢書文化と同系統のものでないという〔吉林大学 1979〕。青銅器時代晩期から鉄器時代早期の文化、戦国中・晩期から漢代早期とする〔劉紅宇 1990〕。いずれにしても、この農安地域は、第二松花江中流から下流域にかけての夫餘の境域にふくまれよう。

**松花江・揮発河・横道河流域—東豊・東遼—** 東豊大架山〔洪峰 1987〕は、松花江の上流、揮発河・柳河と横道河の合流地点の北 4km の山上に位置する。土器（高坏など）、2 種類の鉄鏃が堆積土から出土。かつて付近で 2 基の石棺墓が発見されている。10 余里離れた税局子后山遺跡で鉄鏃と土器が採集されている。1985 年に試掘され、石器・土器・鉄器（鏃、槌）が出土〔吉林省考古研究所 1988〕。

東遼石駱遺跡〔劉升雁 1983〕は、吉林省東遼県石駱公社の彩嵐と長興大隊の丘陵上に位置する。

墓群は壊され、遺物が採集された。土器、銅器（銅劍、扣 7、鈴、動物飾金具、獸紋銅牌飾、四虺紋鏡 1、日光鏡 1、精白鏡 1、星雲紋鏡 1、半兩錢 1、五銖錢 1、貝形銅製品、銅梳 1、銅扣、護心鏡）、鉄器（銅柄鉄劍 1、鏃頭劍 1、矛 1、鏃 1）、金銀器（玉石・瑪瑙付金耳飾 2、玉石・瑪瑙付銀耳飾 2）。玉石串珠（白石料、藍色軟玉、緑松石、瑪瑙）123 個。前漢末期。現在、彩嵐北山墓群や石駱北山墓群とよばれる〔『中国文物地図集吉林分冊』〕。

銅柄鉄劍、動物飾金具、獸紋銅牌飾、前漢鏡、漢代貨幣、金製耳飾、瑪瑙珠など西豊西岔溝や榆樹老河深墓に共通する遺物が出土している。松花江・東遼河の最上流域に位置し、分水嶺をへて西豊西岔溝と約 30km の距離にある。松花江とその支流にひろがる夫餘西界域にあたる。玄菟郡をつうじて、前漢代の文物が流入した。銅柄鉄劍や獸紋銅牌飾など、夫餘独自の文物がみられる。夫餘の西南道の大規模な遺跡である。

**遼河・寇河流域—西豊—** 西岔溝墓群〔孫守道 1960〕は、遼寧省西豊県に位置する。松花江上流から分水嶺を越えた、遼河の支流、寇河の流域に位置する。丘陵上で 63 基が発掘された。いずれも長方形土壙墓で、長さ 170cm、幅 80cm、深さは地表面から 20～60cm である。墓の方位は西北—東南で、頭向は西北。武器の矛・刀・劍は人身の左側、下身や上身側には各種の銅鏃・鉄鏃、頭部に銜などの馬具が置かれていた。土器は横に並べ、ふつうは 2 個、多くは 6 個である。鏃頭小刀や鉄錐、銅鈴、紡錘車などは腰部で出土。副葬品にちがいがあり、武器、馬具、服飾品が出土するもの、土器だけのもの、わずかな服飾品のものがある。死者の身分と地位による区別があり、墓葬間に身分・地位の差がある。多くの墓葬から馬牙が出土し、東部の墓区では 3 体の馬頭骨が埋葬され、殉馬の風習があった。多くの墓葬の武器に戦闘のさいの痕跡がある。出土した 13 体の人骨は青年、





図5 東北アジアの鉄剣・鉄刀

壮年が多く、老年は少ない。遊牧部族の共同墓地で、墓群の存続時期は半世紀、長くて1世紀と推定されている。

剣の最長は102cm。銅柄は双鳥式（在地型）と環頭（中原型），柱形柄首のものがあり，木柄は菱形鏝で，茎部に算盤玉が串状に裝飾されているものがある（図5）。鏝は山形格（鐔）式の中原型，菱形格式の在地型がある。老河深の鉄剣と類似する。鏃として細石鏃，骨鏃，銅鏃，鉄鏃があり，銅鏃が多い。

出土遺物のなかで，漢系文物は鉄工具・陶器・兵器・馬具・銅鏡・服飾・貨幣で，陶器・鉄工具・変形蟠・文鏡の類品は遼陽で出土している。在地の「乳点紋夾砂陶器」は遼陽三道壕前漢村落址

でみつかった〔孫守道 1960〕。「匈奴西岔溝文化」と命名されている。

西豊西岔溝遺跡が鮮卑族墓〔孫守道 1960〕という説にたいして、烏桓族説〔曾庸 1961〕、夫餘族〔田村 1984、田村晃一 1987〕がだされている。西岔溝の触角式銅劍や銅矛は戦国末期以来の系譜をひくもので、老河深と共通する。墳墓の構造や群構成も一致する。老河深墳墓群は平地での、微高地上に立地し、木棺墓も方向が一定で、規則的な配置をする。西岔溝墳墓群は高台の丘陵上にあり、その配置状況は老河深に類似する。

通榆興隆山墓〔宗述 1982〕は西豊の西北 275km、老河深から西 300kmへだてている。遺跡は丘陵上に立地する。長方形堅穴土壙墓内で 4 体の人骨（仰臥直身）、頭向は西北。馬・牛・羊などの動物碎骨が副葬。石鏃、銅器（鈴、鳴鏑、泡）、金耳飾、金馬飾、瑪瑙・青玉・緑柱石・緑松石の串珠、五銖銭、貝製品、土器が出土。前漢中期から後漢前期である。墓葬の構造や副葬遺物は老河深墓群と類似する。長頸壺は吉林抱子沿下の双耳壺の器形に類似する〔馬徳謙 1987〕。吉林東団山から西「千里」の距離にあり、鮮卑と夫餘の境界地帯にあたる。

通榆后桑屯〔田廣生 1987〕で金馬牌飾 1 点（長さ 5.2cm、高さ 2.7cm）が出土している。老河深のような墓群が存在するのであろう。鮮卑と夫餘の境界に遺跡である。

**木槨・殉葬・玉匣** 吉林帽兒山墓群、榆樹老河深墓群、東遼石驛墓群、永吉学古墓などで土壙木槨墓が発掘されている。木槨墓で木棺は未確認である。「有槨無棺」帽兒山の木槨構造は角材を積みあげた漢系統のものである。

夫餘では、「殺人殉葬多者百數」というように、殉葬の制があった。西岔溝墳墓群では並列された土壙（木棺）墓群があり、殉葬とみられる。馬葬も殉葬で、もっとも貴重な動物である馬の供犠があった。殉葬は夫餘の王権、支配権力と関係する。

王都の帽兒山墓群を中心に、老河深・西岔溝墓群などが知られるが、いずれも集団墓である。老河深墓群では長方形土壙墓や木槨墓がある。木槨内に棺施設は未確認で、「有槨無棺」といえる。老河深墓群で組み合わせ式木棺といえる構造のものがあるが、『三国志』東夷伝の概念では「槨」である。

帽兒山墓群では、漢系の角材の組み合わせ木槨が存在する。遼東郡や玄菟郡からの墓制の刺激伝播、漢人の移動、移住などの交通関係があった。

夫餘王の埋葬用の玉匣が玄菟郡で保管、管理されていた。金鏤玉衣や銀鏤玉衣のようなものである。また夫餘の庫には、漢の玉璧・珪・瓚などが宝物として保管されていた。

夫餘の境域内に分布する、吉林帽兒山墓群、榆樹老河深墓群、東遼彩嵐墓群、西豊西岔溝墓群などで漢鏡と曲帽形帯鉤は漢・玄菟郡との関係をしめす文物である。第 1 次玄菟郡の時期から政治的関係があった。後漢の安帝永寧元（120）年、印綬と金綵が授けられている。

**夫餘の鉄と漢** 榆樹老河深、榆樹一八盤、農安伝田家屯柁子、永吉学古東山、吉林帽兒山、吉林碾磨山、西豊西岔溝などで鑄造の鏹・斧・鑿、鍛造の劍・刀・鎌などの鉄器が出土している。戦国燕の長城外に分布する鑄造鉄器でなく、漢代にあらたに発達した鍛造鉄器とともに流入している。

漢代には遼東郡の平郭に鉄官が置かれた。玄菟郡をつうして、鉄器が普及した。製鉄技術や鍛冶技術の移転もなされた。夫餘では独自の鉄劍が製作された。

鉄劍は中原様式の有格（鐔）式と、在地の算盤玉形劍把劍などがある。遼東郡鉄官から供給され

た剣の剣把部分を改造したものがある。

夫餘における鉄器、銅鏡・帶鉤は漢との交流をしめす。技術移転された鍛冶技術によって、武器が大量生産された。武器には弓矢・刀・矛などがあり、家々に「鎧仗」が常備されていた。老河深墓群の出土武器のあり方はそうした状態をしめしている。

銅鏡は楽浪郡（石巖里9号墓、貞梧洞1号墳、東大院里許山）、臨屯郡（咸鏡南道所羅里土城）、夫餘（老河深56号墓、老河深97号墓、吉林永吉）、弁韓（金海良洞里235号墓、大成洞29号墓、47号墓、良洞里162号墓〈鉄〉）、辰韓（含羅里130号墓〈鉄〉）、4世紀以降に三燕地域にひろがる。鑄造の鉄鏡もあり、銅鼎などとともに官営工房で生産されたものであろう。

夫餘は農耕民族である。夫餘では、松花江の支流の氾濫による肥沃な土壌をふくんだ土地で麻・黍・稷・麦・豆などの五穀が栽培されていた。「八万戸」の人口を擁する農業生産力があつた。老河深墓群では、耕起具の鉄鏝（25基）・鉄鍬（14基）、収穫具の鉄鎌は14基から出土している。犁は未確認である。鍬（鋤）・鏝（鋤）・鎌の鉄製農具による畑作がおこなわれていた。衣は大袂（白布）、袍、袴をはき、繪・繡・錦・罽の織物、狐・狸・狢・貂の皮を用いていた。養蚕もおこなわれていた。

夫餘伝に「舊夫餘俗水旱不調五穀不熟歸咎於王或言當殺」とある。夫餘の王たる者は五穀とその運命をともしる存在であつた。穀霊そのものを体顕した人神で、水旱を支配する司雨者であつた〔三品彰英1973〕。

**夫餘と挹婁** 挹婁の境域は、牡丹江が合流する依蘭地域、黒龍江（アムール）に合流する同江地域まで平原がつづく。東のウスリー江流域から山塊を越え、沿海州の東海岸の「大海」、黒龍江下流域と、挹婁の地域は広大である。その地域に同仁・靺鞨文化が栄えた〔菊池俊彦1995〕。

3～4世紀の挹婁から5～6世紀の勿吉、ついで7～8世紀の黒水靺鞨、13～15世紀のギリヤークまで同質の生産基盤、前後一系の文化的伝統のもとで、毒矢の使用、人尿使用、地下式住居の慣習が存続した。沃土・挹婁にたいする見聞、記述は母丘儉の侵攻にとまなうもので、信憑性があるという〔三上次男1976〕。

黒龍江省納河市庫勒浅墓群は松嫩平原の北辺に位置する。嫩江中流の左岸の台地上に立地する。52基の土壙墓が発掘され、37基が早期（春秋中・晩期併行期）、晩期が15基で漢併行期に属する考古2006-5）。挹婁の西界あたる。M42は地表面から0.45mで検出された。長さ1.8m、幅0.4～0.62m、深さ0.7mの南北方向の土壙墓。土壙床面に2体埋置され、1体は墓主。墓主の頭骨の左上方に陪葬と1体の人骨とその下でブタの下顎骨2片がみつかる。ブタの供献・副葬は、挹婁伝にみえる習俗とおなじである。

夫餘は挹婁の地を支配して租税を徴収していたという。夫餘の「四出道」の東の敦化から牡丹江をくだり、依蘭から佳木斯へ至るルートがある。黒龍江と松花江の合流地域の同江からウスリー江との合流地域の撫遠、さらにウスリー江をこえて、東海岸にいたる。大海に面し、北沃土の北界からさらに北にひろがる。挹婁は、洛陽から万里をこえる東海の地にある。魏は夫餘をつうじて、挹婁の地を認識していた。



## ④……………高句麗の境域

高句麗は紀元前1世紀ごろ、鴨緑江から渾江流域にかけての地域でおこった。高句麗初期の王都は桓仁（遼寧省）に所在した。桓仁の五女山城で紀元前後から紀元後3世紀の建物跡が発掘されている。近辺の上古城子土城は方形の平地城で、桓仁盆地の中核的遺跡である。

### 高句麗境域と積石塚

『三国志』魏書東夷伝に「積石為封」と記述された積石塚が発達した。その積石塚の分布地域が高句麗初期の境域にあたる（ゴチックは4世紀代の方壇階梯積石塚を含む）。

輝発河流域－柳河地域（色樹背）、輝南地域（邵家店后山・撫民）

頭道松花江流域－撫松地域－（新安？）

鴨緑江上流－長白地域（十二道溝・金華、良種場、安楽）、臨江地域（七道溝・龍崗・西馬鹿泡子・東甸子・砬台・大長川・仙人洞・葫蘆套買家營・滴台）

慈城地域（照牙里・法洞里新風洞・松岩里）

鴨緑江中流域－満浦地域－（延上里、文岳里）、集安地域（禹山・下解放・山城下・万宝汀・七星山・麻線溝・長川・蒿子溝・良民）

鴨緑江・秃魯江流域（深貴里・魯南里・豊清里）

鴨緑江・太平溝河流域（五道嶺溝・太平溝）

鴨緑江・楡樹林河流域（楡樹大高力墓子）

鴨緑江・大路江流域（高地）

鴨緑江中流域－渭原流域－（舎長里・徳岩洞・万戸洞）、楚山地域（蓮舞里・新川里・雲坪里）

渾江下流（古馬嶺高麗墓溝）

渾江中流域－桓仁地域－（望江楼・高力墓子村・上古城子・大把・楊家街・董船營・聯合・湾湾川・大青溝・川里・米倉溝）、財源地域（母背嶺・金家）

渾江新開河流域（横路大隊）

渾江葦沙河流域（播家街）

渾江・頭道河流域（孔家街・楸倒木・西山）

渾江・高麗墓子河流域（江沿）

渾江上流・夾皮溝河（江沿村・南頭屯・向陽村）

渾江・小羅圈河流域（向陽村）

渾江内陸部（買家營）、

蘇子江流域（楡樹郷）

清川江流域－雲山地域－（龍湖里）

大同江流域－大城山地域－（大城山・安鶴洞・高山洞・高坊山）

大同江・南江流域（晩達面）

---

**積石塚構造の発展段階と分布** 積石塚の発達と分布地域は高句麗国家の興起をあらわす。

第1段階は、紀元前1世紀頃、無基壇円丘（方丘）石槨積石塚が出現した段階で、円丘式積石塚が原初形態である。その円丘に方形の「祭壇」が付設された方壇付円丘石槨積石塚が出現する。干溝子墓のような重複構造が平面構造に変化する。

第2段階で方壇石槨積石塚として定型化する。墳丘は方形化し、段（壇）構造が発達する。方壇石槨積石塚から方壇階梯石槨積石塚に発展し、連接墓が発達する。葬送儀礼、埋葬主体の階層に変化があり、とくに大家族墓が発達する。

第3段階で方壇階梯石室積石塚が出現する。切石積石塚としてもっとも発展した段階。將軍塚に代表される。この段階では方壇石槨、方壇階梯石槨、方壇階梯石槨連接積石塚が共存し、階層性を顕著にしめす。高句麗の境域内では石室封土墳もふくめた階層を形成する。

第4段階は積石塚の衰退と消滅、石室封土墳への移行である。方台形石室積石塚のような基底部が方壇で、方錐形の封土の古墳は、高句麗の伝統的墓制である積石塚を継承したもの。積石塚は鴨緑江の北の地域では、渤海時代にまで継続して築造される。

初期積石塚の分布地域の中心は桓仁と集安である。

渾江上流の通化地域、松花江の上流の靖宇や撫松地域、輝発河上流の柳河・輝南地域、鴨緑江の上流の長白地域にも積石塚が分布する。

紀元前後から4世紀にかけて、積石塚が松花江上流から、渾江の全流域、鴨緑江上流の長白地域から、中流域の楚山地域、禿魯江流域から、清川江流域から大同江流域、さらに南部の臨津江から漢江流域と分布する。これらの諸河川の流域を中心として積石塚の分布は、高句麗の各時期の領域関係をあらわす。

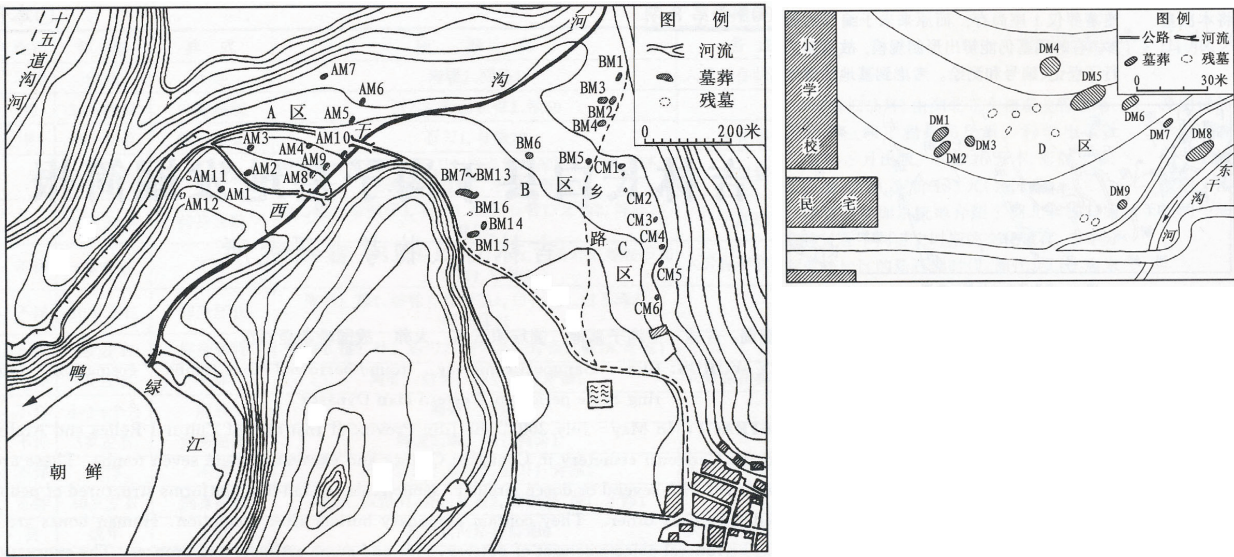
無基壇円丘石槨積石塚は、鴨緑江上流から中流域、禿魯江流域に分布するが、その分布は初期の高句麗の勢力範囲として注目される。漢江流域では、紀元2～3世紀代と推定される無基壇積石塚も分布する。その段階の高句麗との文化的接触などの諸関係があった。

方壇積石塚の段階では、渾河・鴨緑江・禿魯江流域を中心に分布し、清川江・大同江流域におよぶ。3世紀から4世紀前半の時期に想定される。その時期、国内城（集安）に遷都しているが、3世紀には方壇積石塚が発達する。積石塚の膨大な数の分布状況からみて、集安は紀元前後から高句麗の領域内にあって有力な地域であった。

方壇積石塚は3世紀段階に発達し、3世紀後半には方壇階梯積石塚に発展する。とくに割石を加工した石材が使用される。4世紀後半になると、方壇階梯石室積石塚が築造される。方壇（方壇階梯）積石塚は集安・桓仁地域一帯を中心として、鴨緑江上流の長白朝鮮族自治州・慈江道中江郡、大同江流域に分布する。楽浪郡治の時期にも方壇積石塚が大城山一帯などに存在する。鴨緑江下流域では慈江道が西限となる。西北限は、桓仁県地域で、さらに周辺地域の撫順・本溪・鳳城地域にひろがる。これらの方壇（方壇階梯）積石塚の分布状況は、3世紀から4世紀前半頃の高句麗の政治的領域にほかならない。清川江流域でも龍湖里積石塚が知られ、4世紀代に発達する方壇階梯積石塚は、高句麗の南部地域への領域・勢力の拡大と軌を一にする。高句麗と楽浪・帯方郡、さらに馬韓・百濟との政治的関係が背景にある。

---





AM2 ZT2



AM2



BM4



BM2



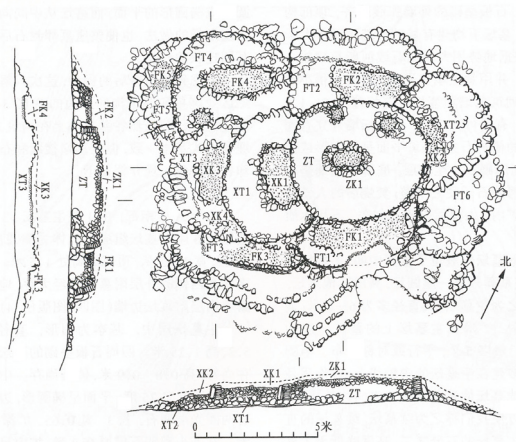
BM5



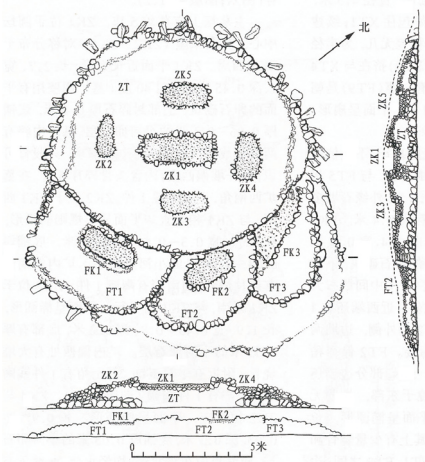
AM1

图6 干溝子墓群 [吉林省文物考古研究所2003]

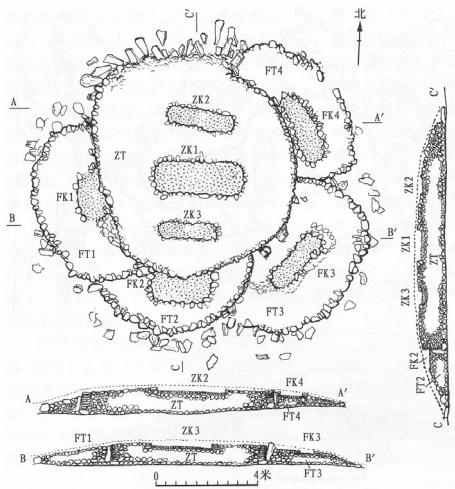




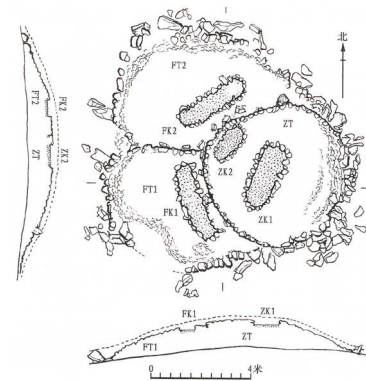
AM2



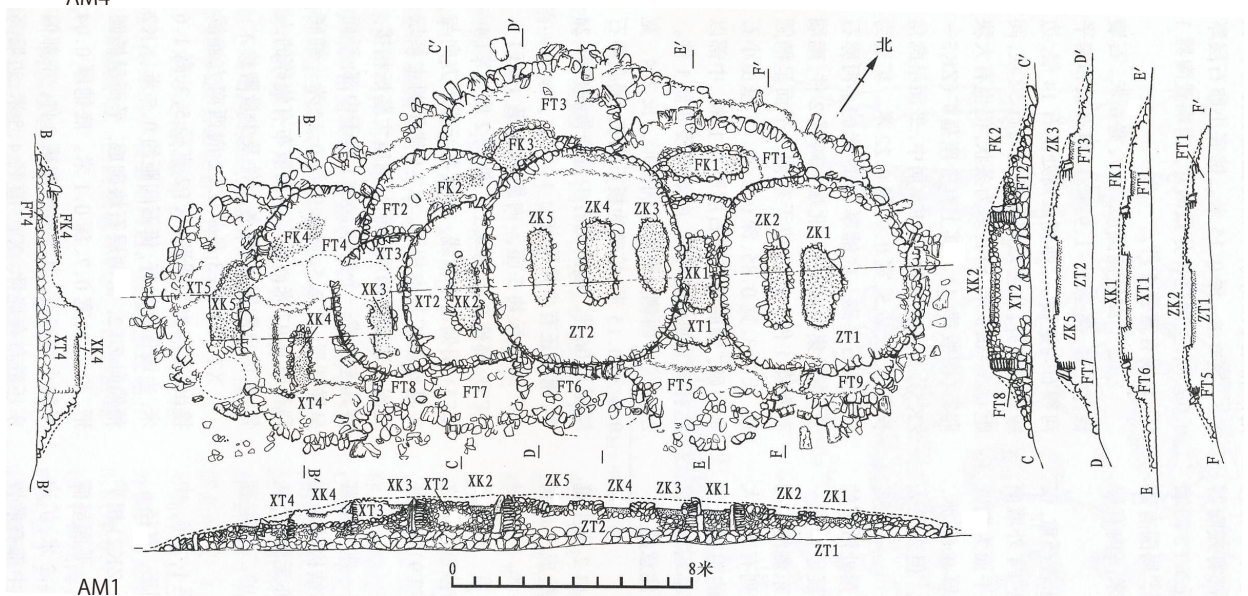
AM3



AM4



BM5



AM1

圖7 干溝子墓群 (AM1·AM2·AM3·AM4·BM5)

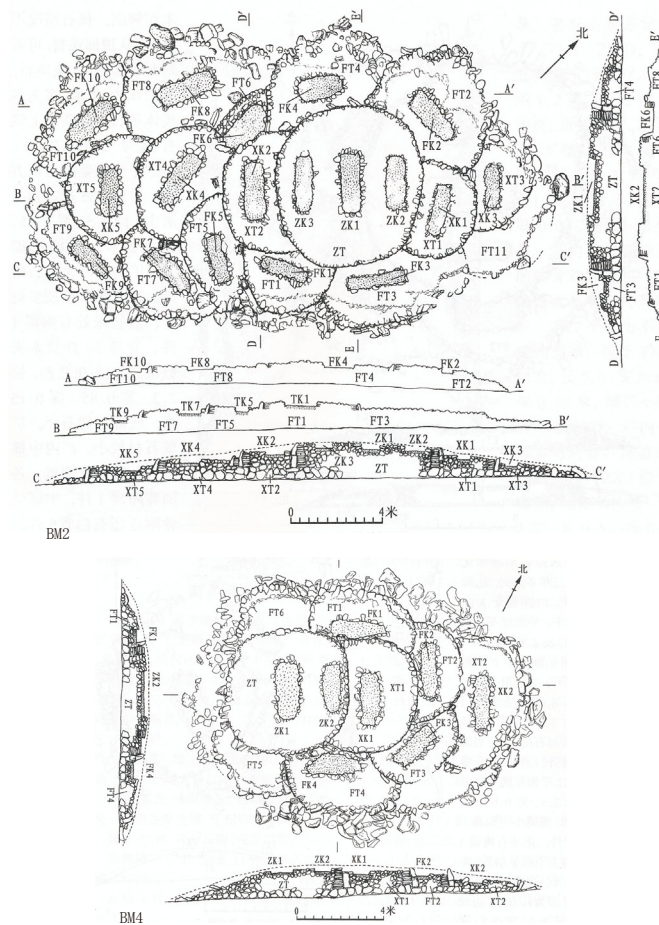


図8 長白干溝子墓群

### 長白干溝子墓群と高句麗初期積石塚

墓群は長白県の鴨緑江の上流の江辺に位置する〔吉林省文考2003〕。墓葬はA区に12基、B区に17基、C区に9基、D区に9基が分布する(図6)。7基が発掘された。AM1は長さ15m、幅11.5mのほぼ長形状の墳丘に10基の列石圍繞墓が重層的に、かつ重複して築かれている(図7)。報告では主墓壇(ZT)、続墓壇(XT)、附墓壇(FT)とよび、主墓壇を中心に接続、付設して墓域が形成されたとみる。墓壇は河原石でおおう積石墓、円形、半円形、扇形の3種があり、墓壇の現高は0.5～1.2m。頂部に長方形や楕円形の墓壙をつくり、焼した人骨をおさめ、埋葬後割石で蓋をした。木蓋ではないという。埋葬施設は石や土でおおわれている。列石や埋葬主体部に切り合いないし接触・接続関係がみとめられる。圍繞列石内に一埋葬主体が配置されている点からも接続墓としえよう。接続部が明瞭で、造墓した時、外護列石は露出していたのであろう。積石も低平であった。下方から上方へ造られていない。実測図から推定しえる構築順序はつぎのとおりである。

AM1: ZT1(3体) → XT2 → ET2 → XT1 → FT1 → FT6(右回り=逆時計回り)  
 XT3 → FT4・FT3 → FT5

AM2: ZT1(2体) → XT1 → FT1

ZT2(3体) → XT2 → XT3 → XT3 → FT2(半両銭5, 一化銭1) → FT3 → FT4 → (右方向)

XT4 → FT4



AM3: FT1(5体) → FT2 → FT3(右回り)

AM4: FT1(3体) → FT2 → FT3 → FT4(右回り)

BM2: ZT1(3体) → XT2 → FT1 → FT3 → FT2 → FT4 → XT3(右回り)

ZT1 → XT1 → FT2 → XT3 → FT11

FT1 → FT5 → XT4 → XT5 → FT8 → FT10(左回り)

BM4: ZT1(2体) → XT1 → FT1 → FT2 → FT3 → XT2(左回り)

BM5: ZT1(3体) → FT1 → FT2(一化銭)(右回り)

AM3は5体埋葬, AM1・AM2(ZT2)・AM4・BM2は三体埋葬, BM4・BM5・AM2(ZT1)は2体埋葬であるが, 1体分の埋葬空間がある(図8)。

AM3の主墳は中央に大形の石壙があり, 四方に直列方向に4体の石壙を配する。殉葬の可能性はある。AM2は2基の主墳が並列し, それぞれ共通の子孫を共有する。

3体埋葬のAM2・AM4・BM2・BM4は並列し, 中央の石壙がもっとも大きい。発掘された7基の集団墓の主墓は2・3・5体埋葬で, 他は単葬である。主墳に連続して3基～10基前後が築かれている。

接続墓は主墓の円周に, AM3が3基, AM4が4基, BM5は2基がつくられ, 4～5基が最小の造墓単位とみられる。右回りが原則で, 左回り(左方向)につくられる。右循環の観念が存在した。墓群は2次葬(火葬)で, 同一墳丘は同一家族数代の聚葬と推定されている。

主墓は家父長であろう。家父長を中心として, 父系の家族が埋葬されている。一夫多妻もありうる。2次埋葬は長子(未婚の兄弟姉妹もふくめ)の可能性はある。次子が独立するばあいも想定される(AM2)。父子数世帯が同居する, 一代の大家族の墓群といえる。干溝子墓群は諸家族集団墓で, 地域集団との関係において存在。A地区は邑落共同体成員の墓群であろう。

干溝子墓葬の年代は, 貨幣(半両銭・一刀銭)や鉄器(鏝)から, 上限が戦国中・晩期で, 下限は戦国晩期から後漢で, 前漢代の墓葬と推定されている。AM2で4次葬の接続墓(FT2)で半両銭5・一化銭1, BM5の2次葬のFT2で一化銭が出土している。主墓は秦漢にさかのぼる。遼寧省鉄嶺邱台遺跡の前漢初の窖蔵で布銭(2415枚)・明刀銭(331枚)・半両銭(130枚)・一化銭(12706枚)が出土し, 戦国の燕・趙, 秦漢の貨幣が流通している。干溝子墓群は邱台遺跡よりおそい。

墓の構造は, 高句麗初期の無基壇円丘石槨積石塚の祖形にあたる。平面は円形が基本である。円形から方形へ変化する高句麗積石塚の原初形態である。青銅器時代の遼東半島の楼上・崗上墓などの多葬墓が単葬化するとともに, 重層的になった。

AM2の最上層の円形積石塚の周囲に立て並べられた護石は, 集安万宝汀242号墓から西大墓, 太王陵をへて將軍塚の護石として発達した。

高句麗の婚姻形態は, 王族間で「一方的婚姻同盟」関係にあり, 一般に「父系外婚氏族制」であった[大林太良1977]。嫁側に婿屋をつくり, 子が成人すると, 婿側の家族と同居する。父子が同居する。一家族墓群を形成する。

干溝子墓群から, 数km離れた鴨緑江沿いの良種場西北墓群, さらに数kmの金華墓群では方壇積石塚が存在する。長白山(白頭山)からの支流が鴨緑江に合流する河岸台地に立地する。生業は五穀栽培, 狩猟, 河川漁猟である。



方壇石槨積石塚や方壇階梯積石塚のなかに、接続墓（串墓）がある〔孫仁杰 1993〕。山城下墓区東大坡 356 号墓，同転山子 162・191 号墓，桓仁高力墓子 19・15 号墓，禹山下 3232・3241 号墓，下活龍 19・18 号墓，禹山下 3105・2891 号墓，万宝汀 242 号墓，七星山 96 号墓などの墓葬である。

家族墓地埋葬制度の視点からとらえ、墓主が生前関係した同輩（親）族・異輩人・同一家族の墓（禹山電線廠北片墓）が出現した。同一縦列にあって、上側の墓が古い。1 基の接続墓はいくつかの家族を単位とした墓葬である〔孫仁杰 1993〕。

接続積石塚から方壇階梯積石塚への変化過程で、石槨墓を主体として長大化した積石塚に横穴式石室が採用、同一墳丘内に 2～3 基が築かれるようになった。つまり「石室」を採用し、追葬が可能となったため、接続形式の必然性がなくなった。接続せずに一墳丘内に複数の埋葬施設をつくった。4 世紀後半から 5 世紀前半にかけての時期である。一墳丘を大家族墓と仮定すると、2 世代以上にわたる。

接続墓にみる集団関係の前段階の墓制は、長白干溝子墓群にみられた。垂直的、重層的な干溝子墓群から、水平的、面的な構造の接続墓に変化した。単一墳丘上の多葬墓、石槨から追葬可能な石室へ変化、さらに墓群の被葬者の階層関係にかかわり、墓葬が単独化した。

干溝子墓群が築かれた漢代併行期に、松花江流域に西团山文化や夫餘、松花江・牡丹江・ウスリー江流域に挹婁の団結文化が存在した。遼東半島の積石墓や積石支石墓と関連する。

## 大同江流域と臨津江・漢江流域の積石塚

大同江流域の楽浪地域では、紀元前 1 世紀ごろから木槨墳・木棺墓（土壙墓）、2・3 世紀には磚槨墳が築造される。楽浪・帯方郡の滅亡以後、353 年の佟利墓（平壤駅前磚室墳）、平壤駅前二室墳（壁画墳）など楽浪・帯方郡系の磚槨墳が築造され、帯方郡の故地には、357 年に安岳 3 号墳のような遼東石槨墓系統の石室墳が造営されている。

楽浪墳墓が造営された同じ時期に、楽浪土城東北の大城山およびその西麓・南麓一帯、さらに東約 20km の晩達山麓で積石塚が築かれている。方壇石槨積石塚か方壇階梯石槨積石塚のように方形である。2～4 世紀代と推定される。勝湖積石塚は 3 世紀後半から 4 世紀前半代である。

平壤付近の積石塚の年代が、楽浪・帯方郡滅亡の 313 年の以前か以後かで意味がことなるが、安鶴洞 1 号墳のように、楽浪郡が存続する時期に併行してつくられた積石塚がかくじつに存在する。楽浪郡の中核地域に、楽浪墳墓と異質な積石塚が築造される歴史的背景が問題となる。積石塚は高句麗の墓制であり、たんなる刺激伝播によって築造されたとはかんがえがたい。積石塚は、今のところ楽浪郡治周辺の楽浪官人層等の墓域とみられる楽浪古墳群では未確認で、大城山山麓一帯の未開の地に築かれている。大同江流域の積石塚は高句麗人の移動、移住をしめす。高句麗と楽浪郡との政治的な交通関係ではないようだ。

玄菟郡（3 次）の置かれた撫順から渾河・蘇子江をさかにのぼり、新賓を経て、富爾江に沿って南下し、渾江に至り、新開河をさかのぼって集安に出るルートは、古代の交通路であり、渾江以東の地域には、積石塚群も分布する。まさにその時代の墳墓型式が大同江流域に伝わっていた。

鴨緑江・渾江流域における積石塚の分布地域は、高句麗初期の領域関係をあらわすが、楽浪・帯方郡滅亡以前の 3 世紀代に、大同江流域に分布する積石塚はさまざまな交通関係によるものであった。

楽浪郡地域に積石塚が存在することは、楽浪郡の政治的崩壊を示唆する。3世紀には楽浪郡の南部に帯方郡が設置された。帯方郡が政治的中心地となっていた。

**漢江流域の積石塚と高句麗** 臨津江流域に京畿道漣川郡三串里・仙谷里・鶴谷里、北漢江流域に京畿道陽平郡汶湖里、江原道春川市中島、平昌郡鷹岩里・鍾阜里・中里・馬池里・大和下安味里、南漢江流域に忠清北道堤川郡陽坪里・桃花里積石塚などが分布する。三串里積石塚・中島積石塚のような川原石を積み上げた無基壇円丘積石塚は2・3世紀代とみられる。

これらの積石塚を「葺石式積石墓」で、3世紀前後から3世紀中葉ごろに形成された「濊系種族集団」の墓とみる〔朴淳発2003〕。濊は太白山脈の嶺東地域にひろがる。

石村洞1号墳は方壇連接石槨積石塚で、その特異な構造の積石塚は高句麗の影響なしには成立しがたい。3・4号積石塚も典型的な高句麗積石塚である。その年代は、年代幅をおおきくみて4世紀中葉から5世紀初葉であるが、4世紀末の広開土王の南進とともに駐屯・定住化した高句麗人の墓制もふくまれよう。広開土王の南下以前に高句麗人の移動・移住はおこなわれたので、すべてが4世紀末以降とはいえない。移動・移住のあり方も、石村洞積石塚群のような墳墓の配列状況は、親族関係に規定された埋葬方法であり、家族集団をふくめた諸集団によるものであろう。

馬韓時代の漢江流域には、楽浪の木槨・木棺墓系統の墳墓がつくられていたが、3・4世紀に積石塚という墓制が伝わり、石村洞東方遺跡群は旧・新来の墳墓が共存した様相をしめす。

漢江流域に分布する積石塚は3～4世紀であり、石村洞4号墳のような基壇積石塚は、高句麗においては中・下層階層の墓制であり、戦争・領域支配における集団移住・墓制の伝播の一端をしめす。

## ⑤……………濊の領域

『三国志』東夷伝によると、濊は南は辰韓、北は高句麗と沃沮に接し、東は大海にのぞむ。西は「今朝鮮之東皆其地」とある。「朝鮮」は楽浪・帯方郡をさす。『後漢書』に西に楽浪に至るとある。南は馬韓でなく、辰韓と接する。「単単大山嶺」以西は楽浪郡に属し、以東の七県は東部都尉が治めた。楽浪郡は平壤一帯、帯方郡は黄海南北道一帯である。太白山脈を境に、嶺東の濊と嶺西の濊が存在した。したがって濊の境域は咸鏡南道の安辺平野、江原道東海岸沿いの通川から江陵、臨津江・北漢江上流の広大な地域にあたる。桓帝・靈帝末期に韓濊が強盛となった。公孫康は204年に屯有県以南の荒地に帯方郡を設置し、韓・濊を攻撃する。帯方郡と韓、嶺西の濊とは近接していた。東の「大海」について、濊は「東窮大海」とあり、東沃沮の「濱大海而居」、挹婁の「濱大海」という表現のちがいがあがる。濊は、慶州北方の慶尚北道迎日郡冷水里付近出土の「晋率善穢伯長」銅印からも、朝鮮半島東海岸の南までひろがっていた。

「嶺西濊」も太白山脈を越えた西海岸近くまで進出していた〔武田幸男1989〕。東濊（嶺東穢）は高句麗に服属し、3世紀前半には魏に属した。嶺東の東濊の中心地は江陵、嶺西濊は春川であろう。濊の戸数は2万戸であった。

江原道春川の中島遺跡の土器を標識とする原三国時代の「中島式土器」は漢江下流域の風納洞土城や湊沙里遺跡から中流域の大成洞遺跡などに分布する。濊から馬韓の地域である。

北漢江流域の達田里（京畿道加平郡）で楽浪系の木槨墓、その下流の加平大成洞遺跡集落跡で楽

浪土器、鑄造鉄器が出土している。また北漢江流域には汶湖里・中島・鷹岩里積石塚など高句麗系の積石塚が分布する。嶺西の濊の地域にあたる。

東海岸の江原道安仁里集落跡で楽浪系土器、鑄造鉄器が出土している。濊と楽浪・帯方郡との交通関係をしめす。東海岸一帯に濊族の村落が点在した。江陵の「濊土城」については確認しえない。

広開土王碑にみえる高句麗の百済・濊への侵攻記事、つまり攻破された濊に城・村が存在した。政治的に部族同盟を形成していたのであろう。

平壤夫租濊君墓（貞栢洞1号墳）銀印の「夫租」は咸興の地である「夫租の地にいた濊（＝穢・濊）」の存在をしめす〔武田1989〕。夫租濊君は楽浪郡治周囲の墓域に埋葬された。

伝江原道「晋率善穢伯長」銅印、吉林省集安の「晋高句麗率邑長」・「晋高句麗率伯長」印など晋代の印が出土している。3世紀末葉から4世紀に濊とかかわりのある勢力、「穢族の渠帥」がいた。西晋と濊・高句麗との国際関係がわかる。出土地不詳であるが、伝慶州の位至三公鏡（旧李養菟集品）、伝榮州および伝慶尚北道龍城里出土の西晋・東晋の帯金具もしられる。西晋は高句麗・馬韓・辰韓・濊・倭と政治交渉をおこなっていた。

4世紀末～5世紀初め、広開土王碑文にみえる「吾れ躬ら巡りて略来せし所の韓と穢」から、220戸の守墓人烟戸が徴発された。穢（濊）が百済と接していた。広開土王とその兵は、国内城から楽浪・帯方郡の故地を経て漢江流域に至り、百済・濊を攻破した。咸鏡南道から江原道の東海岸一帯に嶺東の濊が存在した。

濊は辰韓の北、太白山脈の東麓の東海岸から江原道の山間地域にかけて分布する。ソウルの北方の春川地域は馬韓ないしは濊の故地である。

また『三国史記』の奈勿尼師今40年（395）の靺鞨侵北邊。出師大敗之於悉直之原（新羅本紀第3）や炤知麻立干3年（481）の「高句麗與靺鞨入北邊。取狐鳴等七城」（新羅本紀第3）の記事に靺鞨がみえる。悉直は三陟、何瑟羅は江陵で、新羅の「北辺」として意識されていた。高句麗と靺鞨（濊）は別の存在である。高句麗の長寿王は468年、靺鞨兵一万で、新羅悉直州城を攻取した。そのころ悉直（三陟）は新羅の領域にあった。481年、新羅の炤知王は「北辺」に侵入した高句麗と靺鞨の軍を破る。新羅は高句麗と靺鞨を区別していた。高句麗と濊（靺鞨）は政治的、軍事的同盟関係にあった。新羅がそれらの地域を掌握したのは炤知王から智証麻立干代、500年前後のころであった。

5世紀後半以前、三陟から江陵にかけて、その以北の通川から安辺にかけて、濊（靺鞨）の勢力が存在した。小白山脈南麓の安東から蔚珍・江陵にかけての地域に秦韓勢力が存在した。

5世紀末以前の嶺東地域および小白山脈南麓地域は非新羅地域であった。新羅に服属化される以前、秦韓（『宋書』）と認識されていた。

これらの慶尚北道江陵から蔚珍にかけての東海岸地域、奉化・榮州・安東など小白山脈南麓一帯の地域は『宋書』にみえる「秦韓」と推定される。新羅に完全に服属していない地域が、倭・宋によって「秦韓」と認識されていた。『宋書』の438年から478年まで、5世紀第2四半期から第3四半期にかけてであった。「慕韓」は全羅南道の榮山江流域に存在した。

江陵草堂洞B16号墳の山字形金銅冠は5世紀末から6世紀初め、東海湫岩洞B地区A21号墳の青銅冠は6世紀中葉である。秦韓勢力は新羅にくみこまれ、冠が与えられた。そのころ積石木槨墳も築造された。5世紀末には、蔚珍から江陵付近まで新羅の領域となった。6世紀中葉に新羅の真

興王は高句麗・濊の地を支配した。

## ⑥……………韓の境域

馬韓諸国は、奚襄国、牟水国、桑外国、小石索国、大石索国、優休牟涿国、臣漬沽国、伯济国、速慮不斯国、日華国、古誕者国、古離国、怒藍国、月支国など凡そ五十余国であった。大国は万余家、小国は数千家、総十余万戸であった。辰王は月支国を王都として、馬韓・弁韓・辰韓諸国を治めていた。倭国は三十国で、邪馬台国七万戸、投馬国五万戸、奴国二万戸で、馬韓諸国の大国に比べ、大きい。夫餘は数千家と数百家の大小の国邑にくらべると、韓諸国の規模は大きい。

伯济国は漢江流域の風納洞土城一帯である。帯方郡治は鳳山郡で、瑞興江・載寧江流域の平野一帯が帯方郡であった。馬韓の北界は、臨津江上流の鉄原付近であろうか。漢江のソウル附近の間に奚襄国から臣漬沽国の七国が存在した。

臨津江・漢江流域に、六溪土城、瓠蘆古塁、無等山城などの関防遺跡など、馬韓、百濟、高句麗の軍事関係の遺跡が分布する。

坡州六溪土城・舟月里遺跡は臨津江の河岸段丘に立地する。土城は北壁 260m、東壁 407m、南壁 402m、西壁 699m、全長 1858m と推定されている。凸字形などの住居跡 15、堅穴 11 が発掘。高句麗土器が 10 数点確認された [京畿道博物館 2006]。

舟月里は六溪土城をふくむ一帯である。96-7 住居跡は凸字形で、土器と鉄器（鉄鏃、鎌）が出土している [京畿道博物館 1999]。漢陽大発掘の 2 号住居跡では 4 世紀代の高句麗土器（四耳壺）と波状紋短頸壺が出土している。後者は安岳 3 号墳（357）の土器に類似し、4 世紀後半代である。

北漢江流域の京畿道加平郡達田里遺跡で楽浪系の木槨墓が見つかった、その下流の加平大成洞遺跡集落跡でも楽浪土器、漢系の鑄造鉄器が出土している。北緯 38° から北緯 39° 線の北漢江から臨津江流域は、楽浪・帯方郡と濊と馬韓の接触地帯である。

風納洞土城は漢江に面する。長方形の土城で周囲 3.5km。西辺の土城壁は幅 43 m、高さ 11 m という。土城内に環濠があり、それを切る凸字形住居跡があり、土城も 3 世紀前後には築造が完了している [申熙権 2002]。土城は構造的に楽浪土城や帯方土城（智塔里土城）の郡治や県城に類似する。馬韓の伯济国の中心地である。土城内部では抹角方形、六角形（凸字形）、長方形の住居跡が発掘された。六角形住居跡はソウル夢村土城、湊沙里、龍仁水枝、議政府民楽洞、抱川自作里、坡州舟月里などと類似するという。四周に敷石帯をめぐらせた祭祀用建物（16 × 14 m）がある。「大夫」・「井」銘の線刻土器もみついている。玉作や鍛冶工房がある。未鋦の土製鎔范から鑄造もなされていた。黒褐釉壺、青磁、施釉陶器、銅鏃斗などは馬韓・百濟と魏晉と対外関係をしめす。近接する夢村土城で錢紋陶器、帯金具、陶磁器など西晋・東晋代の遺物、高句麗土器が出土している。洪城神衿土城は 3 世紀末～4 世紀初の築造され、5 世紀中葉ごろまで存続する。夢村土城と同じ灰釉錢紋陶器片が出土している [朴淳発 2003]。

**馬韓の製鉄と鍛冶** 京畿道南揚州郡長峴では青銅器時代の住居跡 12、堅穴遺構 3、原三国時代の住居跡 85、堅穴遺構 55、溝状遺構 14、土器・鉄器が発掘された。土製鑄型、鉄滓、送風管が見ついている [洪チユン 2008]。鑄造工房に原材料が運びこまれ、生産された。



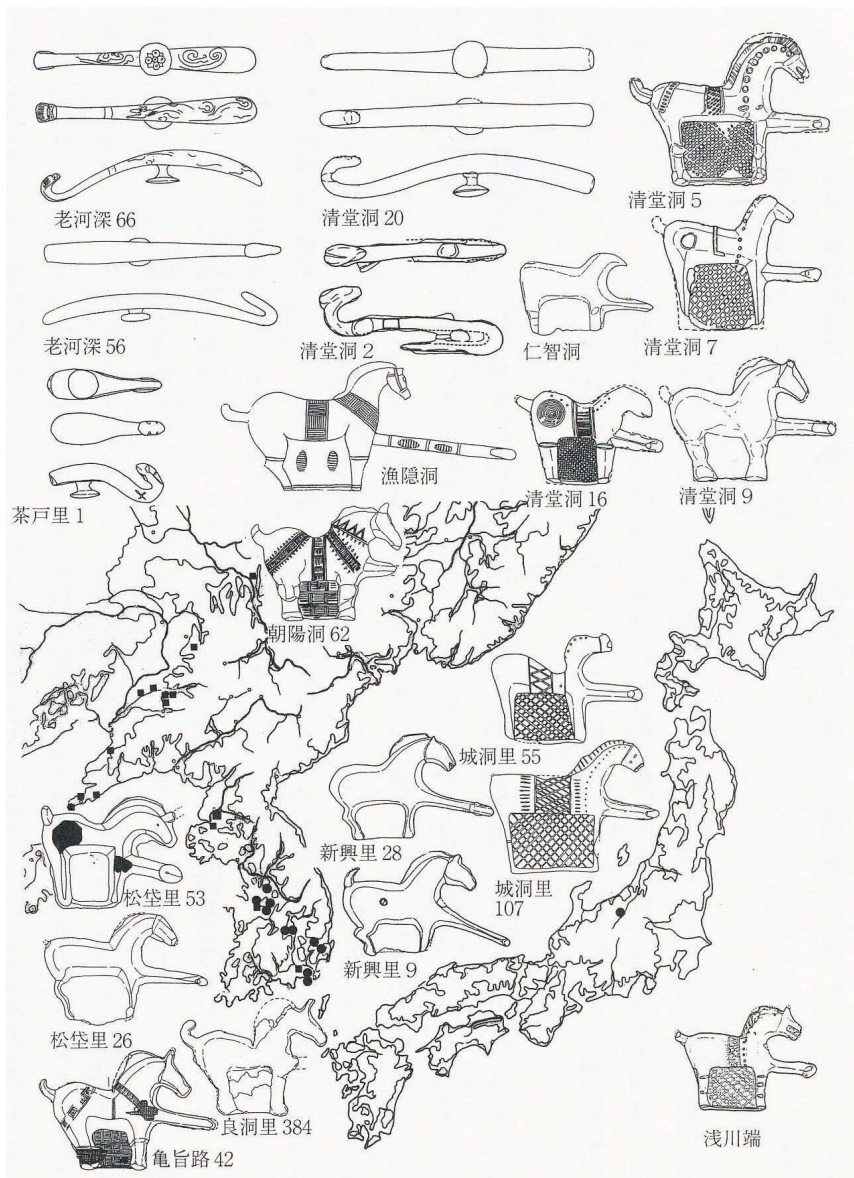


図9 三韓・倭の馬形帶鉤

ソウルの漢沙里集落跡のA地区601号遺構（竪穴）で廃滓壙で、鉄滓・鍛造剥片・刀子・釘・不明鉄器片などが出土している。19号の円形竪穴住居は鍛冶工房跡で炉とともに鏃・釣針・鑄造未鍛片・鉄片、鉄素材の裁断片など27片の鉄器が出土している。26・35・38号住居跡内に作り付けの竈があり、鉄鏃・鑄造斧形品片が出土。各住居跡内で、鑄造斧形品などの鉄器片が遺存し、鉄器片が集積された形跡がある。

ソウルの南、京畿道華城の旗安里製鉄遺跡がある。送風管は大形かつ瓦質で、楽浪・帶方郡をつうじて、製鉄技術の移転がなされたことを示唆する。

忠清北道鎮川石帳里製鉄跡は3世紀後半から4世紀代で、馬韓から百済にいたる一大製鉄跡群である。3世紀段階で、七支刀を製作しうる技術段階にあった〔鈴木勉・河内國平2006、東潮2008〕。

**辰王の統治境域と馬形帶鉤** 馬形帶鉤は2世紀後半ごろに出現し、3世紀代に発達する。京畿道安城から忠清南道天安、忠清北道清原・清州、慶尚南道金海、慶尚北道尚州の地に分布する。馬韓・弁韓・辰韓の三韓地域にひろがっている（図9）。天安—清州—尚州—金海（狗耶国）—長野（倭）

表3 曲帽型帯鉤の分布

銅帯鉤・鉄帯鉤
遼東郡：遼寧省旅順牧羊城，旅順三瀾区韓家村漢墓，大連漢代貝墓，大連營城子貝墓群，金県大李家公社大嶺屯城，新金県花兒山7号貝墓，新金県花兒山8号貝墓，蓋県九・地郷村1号墓，遼陽市三道壕西漢村落跡第1・2・4・5号住居跡，瀋陽伯官屯1号墓
玄菟郡：撫順市小甲邦3号墓，撫順市劉爾屯村1号墓，撫順市劉爾屯村前漢墓
楽浪郡：平壤市楽浪区域石巖里52・194・212・257号墓，貞栢洞1・3・5・6・7・8・10・11・36・37・53・58・62・92号墓，貞栢里4・13・127（王光墓）号墓，上里，平安北道德星里，南浦市台城里4・5・6号墓，黄海南道葛峴里，金銅鈔帶（石巖里9号墓，貞栢里2号墓，貞栢里127号墓，彩篋塚
夫餘：遼寧省西豊県西岔溝，吉林省榆樹老河深56号墓
馬韓：忠清南道天安市清堂洞2号墓（鉄製），清堂洞20号墓
弁韓：慶尚南道昌原郡茶戸里1号墓

を結ぶ点と点は，面的なひろがりをもつ。馬韓を中心に弁韓・辰韓・倭の地域に分布する。

馬韓：京畿道安城郡安城邑仁智洞，忠清南道天安市清堂洞墳墓群（5・7・9・16号墓），忠清北道清州市松岱里墳墓群（1・6・9・11・26・28・38・2・53），忠清北道清州市鳳鳴洞墳墓（A・3・26・30・44・45・61・70，B・26・36・66・85・101・107，C・14・16・42号墓）

辰韓：慶尚北道永川郡漁隱洞，慶尚北道慶州市朝陽洞60号墓，慶尚北道尚州市新興里墳墓群（9号墓），慶尚北道尚州市城洞里（33・39・55・77・97・104・107号墓）

弁韓：慶尚南道金海市亀旨路墳墓群（42号墓），慶尚南道金海市良洞里墳墓群（382・384号墓）

倭：長野市浅川端，伝榊山古墳

車嶺山脈を分水嶺として，牙山湾にそそぐ曲橋川流域に天安木川土城，清堂洞，龍院洞，花城里，新豊里，錦江の上流に合流する美湖川流域に梧倉松岱里，清州松節洞，清州新鳳洞，鳳鳴洞，鎮川石帳里，鎮川三龍里などの遺跡が集中する。馬韓から百濟時代である。

3世紀の前半，韓に辰王が存在した。「馬韓諸国を中心として，三韓地域にかなりの影響力を及ぼし，諸国の対外関係の調整や，諸国間の交流・利害などに介入していた馬韓の月支国に居て，三韓を統治したのが辰王であった〔武田幸男1996〕。馬形帯鉤の分布地域は，辰王の通交圏（統治圏・領域圏）にあたる。

その月支国は忠清南道北部の天原，礼山地域に比定される。その辰王は，その月支国を治所とし，その国の臣智を掌握し，三韓諸国の王として君臨していた。韓国の西海岸から南海岸に沿った要衝地の臣漬沽国（ソウル北辺），臣雲新国（光州付近），安邪国（咸安），狗耶国（金海）にいたる広域を支配していた（表3）。

3世紀前半代の，公孫氏政権—三韓諸国の辰王政権—倭国の卑弥呼政権は，魏の公孫氏討伐の238年を契機として，あらたな政治的な国際関係にはいった。天安花城里の青磁盤口壺は4世紀中葉～5世紀初めである〔成正鏞1998〕。

天安龍院洞墳墓群では土壙墓137基，甕棺墓2基，石槨墓13基が発掘された〔李南奭2000〕。9号墓から南朝の黒釉鶏首壺，黒色磨研の直口短頸壺・蓋・鉢，百濟土器，木心鉄板輪鏝・轡・鞍金具，胡籙，鏝頭大刀，鉄矛，金銅製耳飾が出土している。鶏首壺は，南京謝温（406年没）墓と謝温（421年没）墓に類似する〔成正鏞1998〕。5世紀の第一四半期ごろである。単龍鏝頭大刀の出土した1号



墓は5世紀前半ごろとみられる。墳墓群では龍文鏢頭大刀、南朝土器、馬具などが出土し、漢城時代の天安地域に、南朝とも交渉にかかわった勢力が盤踞していたことがわかる。

3世紀前半、遼陽を基盤として楽浪・帯方郡を支配した公孫氏政権（燕国）、馬韓の月支国を治所として三韓諸国に君臨した辰王政権、そして邪馬台国を治所とする女王卑弥呼をいづく倭政権が存在していた。

## 弁韓と辰韓

洛東江下流域の、慶尚南道蔚州、梁山、釜山、金海、馬山、昌原、義昌、固城などの諸地域。

弁辰の狗耶韓国から金官加耶の成立する時期に該当する。

集落遺跡：東萊楽民洞貝塚、東萊福泉洞遺跡、東萊萊城遺跡、金海鳳凰台土城（金海貝塚）、  
金海府院洞貝塚、鎮海熊川貝塚、鎮海龍院洞遺跡、固城東外洞貝塚、昌原城山貝塚  
墳墓：蔚州下岱遺跡、金海礼安里、良洞里墳墓群、大成洞墳墓群、金海亀旨路、昌原三東洞  
生産遺跡：城山貝塚（製鉄・鍛冶）、南江流域遺跡群（農耕）

『三国志』東夷伝韓条に、弁韓・辰韓十二国、二十四国の名がみえる。狗耶国（金海・辰韓の）、安邪国（咸安）、古資弥凍国（固城）、不斯国（昌寧）など洛東江流域にある国々である。弁韓諸国に4～5万戸の人口が居住していた。弁辰十二国に別邑があり、各国に渠帥がいて、臣智、險側、樊濊、殺奚、邑借の階層が存在した。狗耶国は港市として発展した。狗耶国は4～5千家からなる大国で、弁辰諸国の中心であった。

狗耶国の金海平野は、標高5mの等高線をたどると、林虎山山塊と鳳凰台が入り江となり、湾を形づくる。鳳凰台・金海貝塚から北へ低丘陵が延び、大成洞の台地につらなる。その北辺で入り込み、小さな潟となる。鳳凰台・会峴里貝塚から東に海岸線に府院洞貝塚が位置する。さらに山塊にそって礼安里墓群や勿禁（鉾山）に至る。湾の西、奥まったところに良洞里墓群が立地する。

金海鳳凰台土城は南北300m、東西200mの独立丘陵上に築かれている（図10）。溝は山頂部の平坦面縁辺と斜面の3カ所で確認されている。下段の溝は断面U字形で、長さ76m、幅2.5m分みつかっている。時期的にさかのぼる。下段部の溝は断面V字形で、上段の標高30mの斜面の溝は一周はめぐらないという。溝の内外に住居が立地する。貝塚は東辺、西辺から南辺に点在する。

金海一帯の古地形の復元と遺跡の立地条件の研究がなされている（図10）[呉建煥・郭鍾喆1989、崔鍾圭1989、徐始男1998]。鳳凰台の北側一帯が居住から最適地であったという。鳳凰台から大成洞にかけての低丘陵から亀旨峰から盆城の西麓から府院洞貝塚に至る、旧金海邑全体が狗耶国の国邑をなしていた。

弁辰諸国には、「城郭」が築かれていた。辰韓には夫餘とどうよう、「城柵」があった。鳳凰台土城の環濠の防備的機能は城柵によって補強されていたのであろう。

狗耶韓国の時期の生活遺跡は鳳凰台、墳墓は大成洞一帯であった[徐始男1998]。鳳凰台から北にのびる丘陵上に大成洞墳墓群がある。3世紀末葉から5世紀初葉の金官加耶の墳墓群である。丘陵周囲の緩傾斜面、微高地に2～3世紀の弁韓時代の墳墓がつくられている。丘陵東辺のⅠ・Ⅱ区、西南部のⅢ（図9）・Ⅴ区、北辺のⅣ区、亀旨路墳墓区域である（表7）。南辺の運動場一帯にもひろがる。狗耶韓国から金官加耶期にかけて、この大成洞一帯では墳墓の立地条件が低地から丘陵上



図10 金海平野の地形復元・金海鳳凰土名城(釜山大学校博物館1998)



図11 金海亀旨路墓群(慶星大学校博物館2000)

□ 2世紀前葉~中葉



にかわった [申敬澈他 2003]。

金海亀旨路墳墓群は、大成洞墓群の北辺に位置する。東西 30m, 南北 20m の範囲で、木棺墓 14, 木槨墓 38, 石槨墓 1, 甕棺墓 4 の 57 基が重層的に築かれている (図 11) [慶星大学校博物館 2000]。木棺墓は 2 世紀初葉～中葉, 木槨墓は 3 世紀第 2 四半期～4 世紀第 4 四半期の時期である。木棺墓壙の規模や副葬品から 12 号墓, 23 号墓, 28 号墓, 38 号墓が上位階層の墓で, 12 号墓は鉄帯・銅釧が出土し, 有力者の墓とかがえられている [申敬澈 2000]。時期別に分類された。木棺墓では 40 号墓を中心として墓群から, 23 (男性?)・12 号墓女性?) を中心とした墓群にかわる。木槨墓では, 46・51 号直列→28 (男性?)・27 号墓 (女性? 切り合い) →21・25 号直列というように変化するようである。並列するばあいがある。9 号墓 (4C3/4) と 5 号墓 (4C4/4), 18 号墓 (3C4/4) と 19 号墓 (4C4/4), 14 号墓 (4C2/4) と 6 号墓 (4C3/4) と 2 世代以上の時期差があり, 並列よりも直列化するようである。

木棺墓は主軸は東西方向で, 頭向は 14 基の大半が東向きである。それにたいし木槨墓は 38 基のうち 4 基が東西方向である。頭向は主軸南北の墓は南向き, 主軸東西の墓は東向きであることが指摘されている。東西方向の木棺墓から, 南北方向の木槨墓に変化した。同時に頭向も東向きから南向きにかわった。その時期は 46・51 号木槨墓の 3 世紀第 2 四半期ごろである。墓葬上の大きな変化である。

金海良洞里墓群は標高 30m ~ 75m の山の傾斜地に造営されている。紀元前 2 世紀末から紀元後 5 世紀にかけての, 木棺墓, 木槨墓, 石槨墓, 甕棺墓など 548 基が発掘された [東義大学校博物館 2000]。尾根の上から下にかけて, 428・70・55・151・99・17・52 号の木棺墓が尾根傾斜面に平行, 木槨墓は等高線に沿って平行に築かれている。55 号墓は 2 世紀前半で, 小形銅鏡, 劍把頭飾, 鉄劍・鉄矛, 瓦質土器が出土している。55 号木棺墓は 34・40 号木槨墓で切られ, 木槨墓が後出する。

狗耶国の墳墓は, 大成洞墓群と良洞里墓群が二大墓群である。良洞里墓群では, 西北 15km の昌原 2000]。尾根の上から下にかけて, 428・70・55・151・99・17・52 号の木棺墓が尾根傾斜面に平行, 木槨墓は等高線に沿って平行に築かれている。55 号墓は 2 世紀前半で, 小形銅鏡, 劍把頭飾, 鉄劍・鉄矛, 瓦質土器が出土している。55 号木棺墓は 34・40 号木槨墓で切られ, 木槨墓が後出する。

狗耶国の墳墓は, 大成洞墓群と良洞里墓群が二大墓群である。良洞里墓群では, 西北 15km の昌原茶戸里墳墓群とともに, 漢鏡, 漆器などが出土している。狗耶国を構成する勢力である。

金海良洞里墓群では, 紀元前後から 3 世紀にかけて, 漢鏡 (162 号墓)・小型鏡 (55・162・427・441 号墓), 銅鼎 (322 号墓), 中広形銅矛 (90 号墓)・広形銅矛 (200 号墓), 馬形帯鉤 (384 号墓), 銅鏡 (235 号墓), 鉄鏡 (162 号墓) などの青銅器, 鉄劍・鉄矛・鉄鏃・斧状鉄板などの鉄器が出土している。その附近で鉄生産が発達していた。とくに鉄素材である斧状鉄板は 162 号墓 (40 個), 200 号墓 (20 個), 235 号墓 (30 個), 280 号墓 (10 個) で出土している。

322 号墓の銅鼎は漢の官営工房で生産され, 樂浪郡をつうじて将来されたもので, 蔚山下岱 23 号墓でも出土している。樂浪郡では石巖里 9 号墓, 貞栢洞 1 号墓, 貞栢洞 8 号墓, 大同江面東大院里, 船橋里, 土城里土城からみつがっている。

384 号墓の馬形帯鉤は形態・紋様からみて, 天安清堂洞墓群のものと類似する。同じ地域の工房で製作された可能性がある。月支国と狗耶国をむすぶ韓の境域内で移動したものであろう。

**弁辰と倭の鉄の交易** 『三国志』東夷伝弁辰条に「国出鉄。韓濊倭皆従取之。諸市買皆用鉄。如中国用錢。又以供給二郡」、『後漢書』に「国出鉄。濊倭馬韓並従市之。凡諸質（質）易皆以鉄為貨」とみえる。「取」は「市（かう）」である。馬韓・濊・倭は弁辰と鉄の交易をおこなっていた。中国の貨幣のように用いられた鉄は素材であり、斧状鉄板である。交換価値をもつ素材であった。弁韓（辰）の鉄は、鉍石ではなく、鉄素材として市買されていた。『三国志』は、3世紀代の同時代に編纂された史書で、当時、中国では貨幣経済が発達し、「如中国用錢」という記載のとおり、斧状鉄板は交換価値をもっていたにちがいない。楽浪・帯方の二郡に供給されていた。楽浪地域の黄海北道銀波郡葛岬里墓や咸鏡南道所羅里土城で出土している。当時の河南省鄭州市古栄鎮など漢の鉄官出土の鉄素材（鉄板）と形態がことなる。『後漢書』では、鉄（鉄素材）を市で取引すると同時に鉄素材は貨幣そのものとする。『後漢書』の編纂は5世紀代で、当時、百済・加耶・新羅・倭で流通していたのは「鉄錠」であった。

楽浪郡に鉄官は置かれていない。平壤助王里出土の「大河五」銘の鑄造鉄斧の「大河」は漢の「河南郡」の鉄官でなく、山東省東平県の「大河郡」で生産された可能性がある。高句麗時代には、平安南北道から黄海南北道一帯の赤鉄鉍や磁鉄鉍は利用されたにちがいない。

狗耶韓国は、弁韓諸国内での流通の中心であると同時に、国際的な交易都市であった。倭国との交易がこの港湾都市を舞台におこなわれていた。同時に楽浪・帯方郡との交通も陸・海路をつうじてなされていた。

金海の港市において、鉄が交易されていた。倭との交易をしめす記事が、『三国志』東夷伝倭人条にみえる。

對馬國 有千餘戸。無良田。食海物自活。乘船南北市糶

一大國 有三千許家。差有田地。耕田猶不足食。亦南北市糶

南北市糶は、「船によって南北〔の国々〕から米穀を買い入れている」[井上秀雄編1974]、「船に乗って南や北に海を渡って穀物を買って入ってくる」[小南一郎1982]である。

倭人は、弁辰で鉄を取（市）っていた。本土の奴国や邪馬台国などの市、弁辰の狗耶韓国で、鉄とコメを交換、バーター取引をしていたのだった。弁韓の海岸部の釜山福泉洞萊城や三千浦勒島などに弥生人が住み着き、鍛冶や交易にたずさわっていた。いっぽう耽羅国の済州島人は「乗船往來市買中韓」と、山東半島から遼東半島、楽浪・帯方郡の、馬韓諸国と、環黄海（西海）の海域で海上交易活動をおこなっていた。

弁辰の地域では、鉄を産するのみならず、「土地肥美、宜種五穀及稻、曉蠶桑、作縑布、乘駕牛馬」であった。鉄製の農具・土木具によって、自然条件に恵まれた土地で、五穀・稻などが栽培されていた。そうした農業生産の基盤に鉄（鉄器）生産があった。斧状鉄板を素材にタビ、鋤・鍬、鎌の農具、開墾に不可欠の伐採具を製作していた。茶戸里遺跡のように紀元前1世紀から鑄造の耒鍬が生産され、普及した。

## ⑦……………倭の境域

倭は帯方郡から「七千里」で、倭の北岸の狗耶韓国に到り、邪馬台国は帯方郡から「万二千里」



と認識されていた。郡の使いが往来し、常に在るところの伊都国に到り、東南百里で奴国に至り、南に「水行二十日」で至投馬国に至り、さらに南に「水行十日、陸行一月」で邪馬台国に至った。「周旋五千里」である。

この距離観は、『周礼』の天下観念によるもので、実数でない。しかし相対的な差違は当を得ていたにちがいない。

邪馬台国は倭国の三十国のなかで「七万余戸」の大国であり、奈良盆地・大阪平野・京都盆地南部（大和・河内・山城・和泉・摂津）、播磨東部をふくむ境域と推定される。邪馬台国は淀川・大和川流域の広範な地域であった。その「北」に投馬国、境界を接して狗奴国が存在した〔東 2006〕。

邪馬台国の国邑の中心地は奈良盆地の纏向遺跡一帯である。三輪山西麓一帯の傾斜地から平野にかけて、大規模な溝をともなう邑落、墓地が造営されている。遺跡の北限は穴師川（旧巻向川）、南限は原巻向川、西は大和川、三輪山麓の太田微高地が中心地と推定されている〔石野博信 2008〕。その微高地を中心に西辺に石塚古墳・東田大塚古墳などの墓群、南辺にホケノ山古墳を中心とした墓群が分布する。

2世紀末の卑弥呼の共立後、倭国のなかで邪馬台国が中核をしめ、邪馬台国内では纏向遺跡一帯で、勝山・ホケノ山古墳・石塚古墳などを築造した勢力が邪馬台国の王族を形成した。つまり卑弥呼の巫覡的性格から推して、邪馬台国の王（族）はべつに存在したとかがえられる。

纏向遺跡では北陸・東海・中国（吉備）・四国（讃岐・阿波）地方など西日本各地の土師器が出土し、人々の移動、移住があった。倭国の王都の邪馬台国の中心地に各地の物資が集積される。土師器は人の移動・移住、交易活動をものがたる。

纏向遺跡は渋谷向山古墳から箸墓古墳の間に立地する。箸墓古墳の造営を機に、陵邑が形成されたという。箸墓古墳の前段階の古墳として、ホケノ山古墳を位置づけているが、この同じ微高地上に箸墓が立地する。倭国王墓として築造されたと推測する。吉備系の特殊器台は箸墓古墳の造営にかかわる。そして纏向遺跡の北に、倭国王墓として渋谷向山古墳が造営されている。王宮と未分化のかたちで、王墓が築造されている。

倭の諸国のなかで、伊都国や狗奴国に王がいた。各国に王に相当する首長はいたのであろう。卑弥呼は制書による任命で、「蕃夷の王」としてあつかわれ、国内の王にくらべて格落ちの扱い〔大庭脩 1971〕という見方がある。倭国の王（女王）とともに伊都国王と狗奴国王が存在した。

**倭王と邪馬台国王** 倭国の邪馬台国内に、倭国王と邪馬台国王の二系列の王が存在したと想定している。『三国志』東夷伝倭人条にみえる「三十国」の呼称はきえてゆく。その時期が、王権の交替など、倭国の形成に画期となった。

〈倭王系列〉

〈倭王墓〉〈おおやまと古墳群〉箸墓古墳（卑弥呼）→西殿塚古墳（壹興）…行燈山古墳…渋谷向山古墳…〈佐紀盾列古墳群〉五社神古墳（倭王）…佐紀陵山古墳（倭王族）…石塚山古墳（倭王族）…市庭古墳…コナベ古墳…ウワナベ古墳〈古市古墳群〉津堂城山古墳…仲ツ山古墳（倭王）…〈古市・百舌鳥古墳群〉上石津ミサンザイ古墳（倭讚）→誉田御廟山古墳（倭珍）→大仙古墳（倭濟）→土師ニサンザイ古墳（倭興）→河内大塚古墳（倭武、雄略）→〈三島古墳群〉今城塚古墳（継体）→見瀬丸山古墳（欽明）

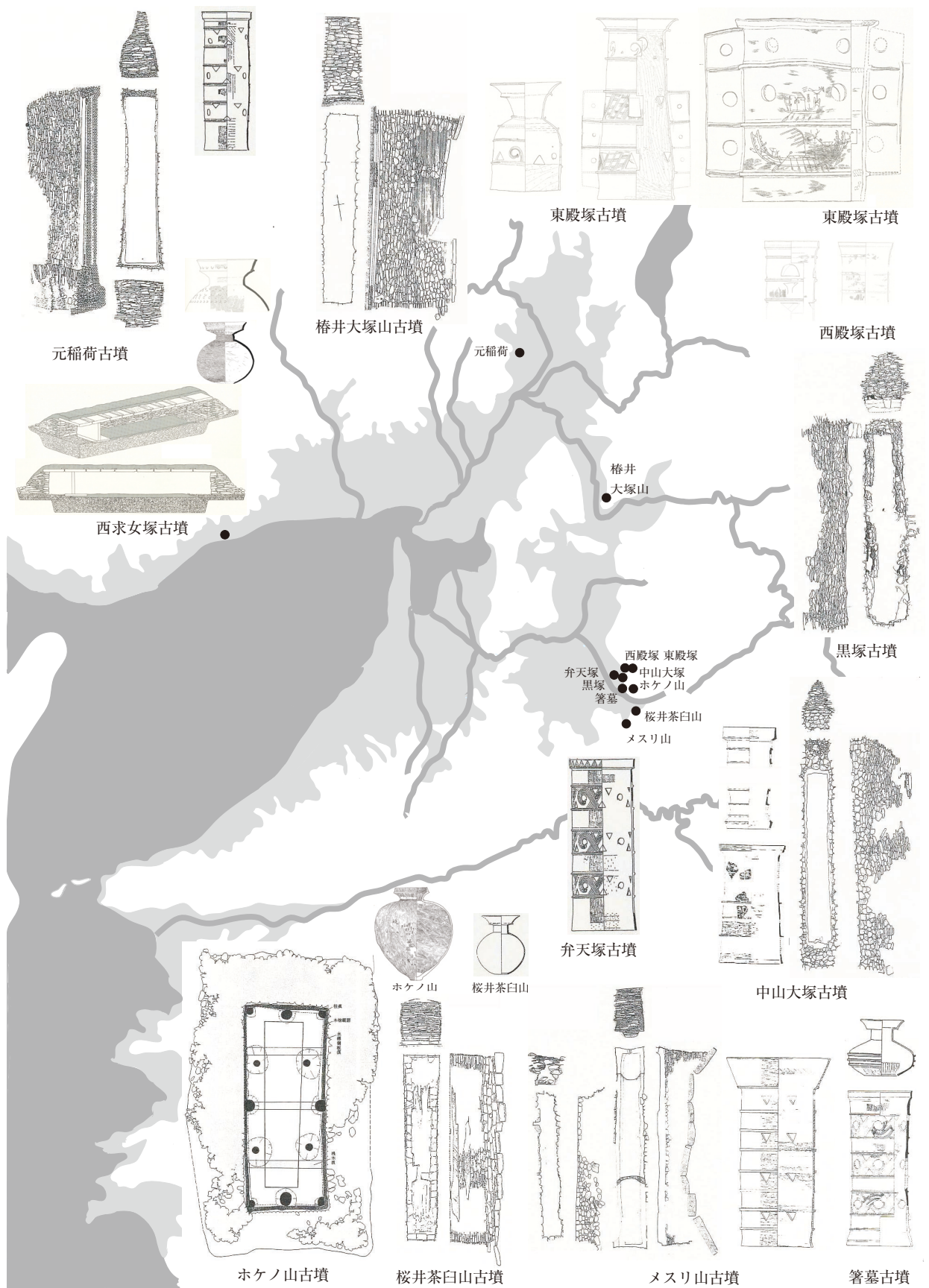


図12 積石木柵・竪穴式石室と特殊器台・特殊器台形埴輪の変遷

表4 倭諸国の王

	対馬国	一支国	末盧国	伊都国	奴国	不弥国	投馬国	邪馬台国	狗奴国
王				王					卑弥弓呼(男王)
官	卑狗 (大官)	卑狗		爾支	兜馬觚	多模	弥弥	伊支馬	狗古智卑狗
副(官)	卑奴母離	卑奴母離		泄謨觚・ 柄渠觚	卑奴母離	卑奴母離	弥弥那利	弥馬升, 弥馬獲支, 奴佳鞮	

〈邪馬台=大和王系列〉

大和勢力〈奈良盆地〉ホケノ山古墳→(纏向石塚墓)→桜井茶臼山古墳→メスリ山古墳…室宮山・島の山→〈馬見古墳群〉新山古墳 巢山古墳 川合大塚山古墳 河内勢力〈大阪平野〉玉手山三号墳→玉手山七号墳

ホケノ山古墳の頂部の壺形土器は、桜井茶臼山古墳の壺形埴輪に変化した。埴輪の出現過程で、二系統がある(図12)。特殊器台形埴輪系と壺形埴輪系である。後者は在地的である。

メスリ山古墳の段階になると、邪馬台国の在地首長層も前者の特殊器台形埴輪から変化した大形円筒埴輪に発達し、その埴輪の文様は消失し、三角透孔のみが遺存する。東殿塚古墳の円筒埴輪の一部には都月型の文様が変化をとげて残存する。

埋葬施設も、ホケノ山古墳の積石木槨構造は、中山大塚・黒塚のような合掌形竪穴式石室ではなく、桜井茶臼山古墳のような平天井の竪穴式石室に変遷する。桜井茶臼山古墳の被葬者は在地的で、玉葉は漢魏の葬制にかかわり、帯方郡をつうじて流入したものであろう。倭政権を構成する有力者であった。ホケノ山古墳と茶臼山古墳の中間に、方格規矩鏡を中心とする鏡群をもつ天神山古墳がはいる。3世紀代の方格規矩鏡は公孫氏政権下の帯方郡から流入したものと推定される。

邪馬台国政権は邪馬台(=大和)政権・倭政権につながるが、政権内の諸勢力は、大和・河内・摂津・山城・播磨地域の首長層で構成される。3世紀段階では、纏向・大和・柳本古墳群の中山大塚・黒塚古墳、山城の元稻荷・五塚原・椿井大塚山古墳、摂津の弁天山A1号墳・西求女塚古墳などが存在する。4世紀になると、大和の馬見古墳群(新山古墳など)・磯城古墳群(島の山古墳)、山城の乙訓古墳群、河内の玉手山古墳群などの諸勢力がみられる。

卑弥呼は2世紀末、倭国の争乱をへて、倭国王として共立された。正始年間の247年ごろに没する。卑弥呼は邪馬台国に存在した。その墓は箸墓古墳である。

箸墓古墳は全長280mで、段築成がある。後円部径は約157m。1尋約150cmで、1区13尋、104尋分の約156mである[宮川彦1998]。前方部・後円部に吉備地域(投馬国)由来の祭器である特殊器台(宮山型)から発達した特殊器台形埴輪(都月型)が樹立され、吉備・播磨・讃岐地域一帯の伝統的な葬制の板石積み竪穴式石室などで構成される。

箸墓古墳は、墳形・埋葬施設、埴輪などの古墳祭式の構造が地域的祭儀・伝統的葬制、共同利害にもとづく祭儀をとりこむかたちで、呪術的支配の表象物としてあらたに創りだされた。倭国の王墓、前方後円墳という倭国の墓制が出現した。

箸墓古墳と築造企画が相似形の「箸墓古墳型」は、京都の椿井大塚山古墳・五塚原古墳、大阪弁



天山A1号墳、岡山備前車塚、福岡石塚山古墳など西日本の各地に分布する〔岸本直文1995〕。初期の倭政権の勢力範囲をしめす。

ホケノ山古墳から箸墓古墳へ止揚し、前方後円形の墳墓は前方後円墳として、諸国によって共立された倭王卑弥呼の死をもって再生された。

卑弥呼は在地の邪馬台国に存在した。倭王は邪馬台国の諸集団から析出され、倭王族が形成されてゆく。3世紀後半以降の邪馬台国の境域は「邪馬台(やまと)」とよぶことができる。「邪馬台」は、宮都の所在地として「大和」として地名にのこる。従来の研究史をかながみて、「邪馬台」を広義の大和、その政治体は「邪馬台=大和政権」とよぶ。「吉備政権」「筑紫政権」と対応する地域政権である。大和政権の中核地は、倭国の宮都である纏向遺跡を中心とした三輪山麓一帯の地域とかがえている。

邪馬台国の境域は3世紀代の前方後円墳の分布状況、特殊器台形埴輪、合掌・穹窿状天井の竪穴式石室、庄内式土器の地域性、青龍三年銘方格規矩鏡、画文帯神獸鏡、三角縁神獸鏡・小札革綴冑の分布状況などによって推定しえる。

特殊器台形埴輪は箸墓、中山大塚、西殿塚古墳、弁天塚、馬口山古墳、元稲荷古墳、兵庫権現山古墳、それらが発達したものがメスリ山古墳、東殿塚古墳、新山西古墳などを出土している。吉備系の特殊器台から変容した特殊器台形埴輪は奈良盆地で発生した〔近藤義郎・春成秀爾1967〕。

箸墓古墳(宮山型、都月型)→中山大塚(宮山型、普通円筒)→西殿塚古墳(都月型)→東殿塚古墳→メスリ山古墳、新山西古墳と変遷する。

近畿の大和川・淀川水系の盆地・平野部に、春日山火山岩・芝山火山岩の二上山系の石材を用いた竪穴式石室が分布する〔奥田尚1999〕。同一構造の石室で、共通の石材でつくられている。邪馬台国内に採石・加工・運搬技術をもつ造墓・石工集団が存在し、分業が発達していた。

輝石安山岩A(羽曳野春日山火山岩)；奈良黒塚古墳、弁天塚古墳、中山大塚古墳、

天神山古墳、京都椿井大塚山古墳

橄欖石玄武岩・橄欖石安山岩(柏原芝山火山岩)；奈良箸墓古墳、黒塚古墳、弁天塚古墳、

西殿塚古墳、波多古塚古墳、馬口山古墳、東殿塚古墳、小泉大塚古墳、兵庫西求女塚古墳

輝石安山岩B(柏原亀の瀬付近)；奈良メスリ山古墳、東殿塚古墳、大阪玉手山九号墳

結晶片岩—京都元稲荷古墳

3世紀代の墳墓で、内行花文鏡(ホケノ山古墳、下池山古墳)、画文帯神獸鏡(萩原1号墳、ホケノ山古墳、黒塚古墳)、青龍三年銘方格規矩鏡(大阪安満宮山墳墓、京都太田南5号墳、出土地未詳)、獸帯鏡(中山大塚古墳)、三角縁神獸鏡(黒塚古墳、椿井大塚山古墳)が出土している。

銘文鏡の型式は、青龍3(235)年銘方格規矩鏡、呉の赤烏元(238)年銘画文帯神獸鏡、景初3(239)年銘の三角縁神獸鏡と画文帯神獸鏡がある。魏が燕(公孫氏政権)を滅ぼし、楽浪・帯方郡を支配したのは景初2(238)であった。倭はその翌年の景初3年に遣使し、卑弥呼に親魏倭王の金印紫綬、大夫難升米に率善中郎将・銀印青綬、次使都市牛利に率善校尉・銀印青綬が授けられ、五尺刀とともに銅鏡百枚などがあたえられた。遣使の年次である「景初三年」、「景初四年」、「正始元年」という年号の銅鏡が存在する。

238年、公孫淵は燕国を樹立、紹漢元年とする。呉は制書をおくり、燕国を承認する。その年の



表5 倭国王系列と邪馬台国系列



238（赤烏元）年銘画文帯神獸鏡が山梨県鳥居原古墳で出土している。赤烏元年は魏が公孫氏を滅ぼした年である。その倭への流入時期・経路は、魏と呉の政治的關係からみて、魏の帯方郡統治の直前であろうか。

紀年銘鏡の青龍3（235）年から景初3（239）年への変化は、公孫氏政権の滅亡に応じて、倭の対外交渉が公孫氏政権から魏へかわるとともに、鏡式もかわった。この点から三角縁神獸鏡を魏鏡とかがえる根拠のひとつである。

青龍は魏の年号で、公孫氏の「燕」の成立後は「紹漢」の年号も使用した。青龍三年銘鏡は公孫氏政権下の帯方郡から流入したにちがいない。公孫氏の勢力範囲に鳥文方格規矩鏡が分布する〔森下章司2003〕。

**邪馬台（＝大和）王系列と倭王系列** 〈邪馬台〉の地域、近畿中部（奈良盆地・山城盆地・大阪平野）における大形前方後円墳のなかで、二つの系列を設定しえる。邪馬台国内に、弥生中・後期に瓜生堂、長原、纏向墳墓群など諸勢力が存在した（表5）。

卑弥呼は倭国王である。邪馬台国王はべつにいたのであろう。卑弥呼の「男弟」は政治権力を掌握したといわれる。卑弥呼から壹與に、王族として王権が継承されるようになった。

箸墓古墳に次ぐ、倭国王系列の墓は西殿塚古墳だ。西殿塚古墳の特殊器台形埴輪は箸墓段階から発達している。墳頂部の壇構造、この大和古墳群に中山大塚、弁天塚、馬口山古墳、東殿塚古墳から特殊器台形埴輪がある。倭国王系列をしめす。特殊器台形埴輪は倭王族、倭王権の象徴となった。円筒埴輪祭式が発達していく。

倭国王の三代以降、邪馬台国内の勢力者が王位についた。それは行燈山古墳の被葬者である。柳本古墳群には黒塚古墳・天神山古墳があり、卑弥呼一族、邪馬台勢力の拠点である。渋谷向山古墳へと王位は継承される。

桜井茶臼山古墳やメスリ山古墳は邪馬台国の王として存続した。在地的なメスリ山古墳勢力は、室宮山古墳などの葛城勢力や馬見古墳群へ移動した。5世紀段階でも邪馬台勢力は存続し、倭政権を構成する勢力であった。倭人伝には卑弥呼をはじめ、魏の官品をもつ人物が記述されている。いずれも実在した人物で、墳墓も存在した。

景初3年 卑弥呼（親魏倭王・金印紫綬）、難升米（率善中郎将・銀印青綬）、都市牛利（率善校尉・銀印青綬）

正始4年 大夫伊声耆・掖耶狗等8人

正始6年 難升米（黄幢）

正始8年 倭載斯烏越等、倭大夫率善中郎将掖耶狗等20人

倭政権は、239（景初3）年から248年に遣使するが、親魏倭王をはじめ、率善中郎将・率善校尉の官品が30余人に授与されている。とくに難升米へ授与した黄幢（軍旗）は魏と倭の軍事同盟の象徴である。

黒塚古墳出土の「U字形鉄製品」を「黄幢」と仮定すると、その被葬者は難升米である可能性がよくなる。黒塚古墳は、のちの西殿塚古墳をのぞくと、箸墓古墳に次ぐ規模の古墳で、墳丘は箸墓古墳と相似形といわれる。竪穴式石室の構造は椿井大塚山古墳より古い。特殊器台型埴輪は未確認であるが、埋葬施設は非在地系の合掌型竪穴式石室である。倭政権を構成する有力者で、出自は

非在地系であるかもしれない。椿井大塚山古墳は在地系の首長墓であろう。

中山大塚では宮山型特殊器台が出土し、立地条件からみて西殿塚古墳に先行する。竪穴式石室は黒塚古墳の前段階のものである。箸墓古墳の被葬者と政権を構成した有力者の墓であろう。

都市牛利の都市は「国ぐにの市を監督する官職名」で、牛利は邪馬台国の宮都に居住する邪馬台国から選ばれた人物であろう。243年の大夫伊声耆・掖耶狗等8人、247年の倭載斯烏越等、248年の倭大夫率善中朗将掖耶狗等20人は、邪馬台国を中心として投馬国（吉備）などの人物もふくまれていたにちがいない。西求女塚古墳も、邪馬台国内の有力者の墓である。

倭王と邪馬台王の二系列の説〔東2001〕にたいして、箸墓古墳→西殿塚古墳→行燈山古墳の「主系列墳」と桜井茶臼山古墳→メスリ山古墳の「副系列墳」ととらえ、前者を「国家的祭祀を担う倭を代表する王」で、後者を「軍事部門を担う最高指揮官」とみる〔岸本直文2008〕。被葬者は卑弥呼（箸墓古墳）・台与（西殿塚古墳）の王墓をのぞいて、当時の軍事的最高指揮官は難升米や都市牛利にほかならない。倭王権を構成する階層に邪馬台王族もふくまれていたであろう。

ホケノ山古墳から桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳へつづく邪馬台の在地勢力は存在した。竪穴式石室の構造や、特殊器台型埴輪、壺形埴輪の差異など、倭国王と邪馬台王が両立したのだ。

桜井茶臼山古墳の玉葉は、公孫氏と魏との外交交渉にかかわった被葬者像をうかがいがらせる。中平年銘の大刀を保有していた東大寺山古墳の被葬者も同様である。

行燈山古墳や渋谷向山古墳の時期から、佐紀盾列古墳群へ巨大前方後円墳の立地がかわることは王権・政権の大きな変容である。

## ⑧……………東夷伝と戦争

### 魏の対外認識と戦争

『三国志』東夷伝は、魏の国家的利害関係にもとづき記載されている。東夷伝の序には、魏が公孫氏を滅ぼし、「東夷」の諸国を統治するという論理でつらぬかれている。「東夷」諸国は、中国に統治され、恩義を享受すべき存在として表現されている。

公孫淵が父祖三代にわたり、遼東地域を支配し、天子が「絶域」としていた。景初年間の238年に公孫淵を「誅」ち、楽浪・帯方郡を「収」め、東夷は「屈服」した。ところが高句麗が「背叛」したので「討」った、烏桓・骨都をこえ、沃土から肅慎を「踐」み、東は大海まで「臨」んだ。

魏の公孫氏を討伐、遼東・楽浪・帯方郡を支配し、高句麗を征伐し、韓・濊を攻略した。三国・燕の四国の攻防は東夷の諸国にうつった。

東夷伝の記述に、そうした魏の東夷諸国への国家的利害関係が表現されている。魏の対外関係、認識がわかる。

高句麗 其人性凶急。喜寇腹  
夫餘 其人麤大，性彊勇謹厚，不寇鈔  
東沃沮 人性質直彊勇，少牛馬，便持矛步戰  
挹婁 人多勇力，無大君長，邑落各有力。

濊 其人性愿慤，少嗜欲，有廉恥，不請。作矛長三丈，或數人共持之，能步戰。樂浪檀弓出其地

正始六年，樂浪太守劉茂，帶方太守弓遵以嶺東濊屬句麗，興師伐之，不耐侯等舉邑降。其八年，詣闕朝貢，詔更拜不耐濊王。居處雜在民間，四時詣郡朝謁。二郡有軍征賦調，供給役使，遇之如民。

韓 其人性愿慤，魁頭露紒，如吳兵，衣布袍，足履革躡蹠。

辰韓 便步戰，兵杖與馬韓同。

東夷伝の序にあるように、魏にとって最大の敵国は高句麗であった。高句麗は「其人性凶急喜寇腹」であるがゆえに、征伐の対象となった。というより魏の侵略戦争の大義名分として、高句麗を敵対視したのであった。

『三国志』は魏を中心とした国史で、東夷伝は魏と東北アジア諸国との国際的政治関係を記録する。倭人条もまた魏の国際的利害関係にもとづく外交関係、倭との軍事同盟という国際関係が記されている。

239（景初3）年の卑弥呼の遣使は、「親魏倭王」に付されることによって朝貢関係に発展した。大夫難升米は率善中郎将，次使都市牛利は率善校尉に除された。

245（正始6）年，詔があり，難升米に黄幢が下賜され，帶方郡に付して假授された。この年，樂浪太守劉茂，帶方太守の弓遵，嶺東の濊を討つ。魏の母丘儉は樂浪郡の軍隊とともに高句麗に侵攻した。

247（正始8）年，倭の載斯，烏越等を郡に遣使。魏は塞曹掾史張政等を遣わし，245年に假授された詔書と黄幢を難升米に拝假した。この年，魏に朝貢し，不耐濊王の位が授けられた。

245年，魏は難升米へ黄幢を授与した。黄幢は軍旗で，軍事的同盟関係を表象する。同時期の遼陽北園墓の壁画のなかに旗旌・幢が表現されている。

黒塚古墳のU字形鉄製品は黄幢の実物資料と推定される。古墳の時期は石室構造，三角縁神獸鏡のくみあわせから箸墓古墳に次ぐ3世紀中葉（3世紀第3四半期）ごろである。箸墓の被葬者は247年ごろ没した卑弥呼と推定されているが，黒塚古墳の築造時期はその没後にあたる。

U字形鉄製品は，弥生時代中期いらいの鍛冶技術でつくられた農工具や武器（鎌・矛・刀・劍）とは異質の鉄器である。あきらかに外来系である。椿井大塚山古墳の冠帽なども同様，魏から流入したものであろう。

黒塚古墳の鉄製品が黄幢である可能性はたかいが，そうでなくとも倭人条に黄幢が明記され，その授受があったことは事実である。「倭国内において，難升米は得た黄幢がどれだけ貴重視されたかどうかあきらかでないという [大庭脩 1971]。しかし魏側の黄幢授与，魏の戦略的意図は明白である。

栗原朋信 [1978] は幢は旗幟の一種で，軍事権の象徴である。倭の難升米に，魏の土徳をあらわす黄幢を与えた。魏は半島の三韓を南方から牽制させる目的で親魏倭王を立て，韓族討滅事件の前年（245年）に魏は突如として倭の大夫率善中郎将難升米へ詔書と黄幢を假授することを決定した。倭地へもたらされたのは翌々年の正始8年であったが，この間に韓族討伐という大事件が起こったため，魏は倭と提携することによって，南北から半島を牽制し，これを直接支配の地たらしめよ





図13 黄幢と黒塚古墳

うとしたとみる。

武田幸男 [1997] は、黄幢は魏の軍事力を象徴したもので、黄幢の授与をつうじて、魏は軍事的連係をはかった。難升米は魏の外臣として率善中郎将のみならず、軍事的司令官に任命された。倭国は魏の冊封体制下で、魏の東方戦略にくみこまれた。247年の遣魏使は、狗耶国との戦争が始まったなかでおこなわれた。244・245年の高句麗遠征、246年の諸韓国の叛乱、辰王の討滅作戦が終了したあとであった。同年帯方郡使の塞曹掾史の張政等が遣わされ、郡丁に留めおかれていた詔書、黄幢をもたらし、難升米に拝仮された (図13)。

倭の難升米へ黄幢の授与は三韓の「牽制」、支配のため、邪馬台国と狗奴国との戦いに檄ともに授けられたものでなく、対高句麗戦争、諸韓国の辰王の討伐のためであった。

魏は、東夷伝序にあるように238年に公孫氏政権をたおし、遼東・玄菟・楽浪・帯方郡を支配する。さらに高句麗・韓・穢の地を攻めた。238年の呉赤烏元年鏡は、呉-魏-燕(公孫氏)-倭との、戦争という政治的交通関係にかかわるものであろう。

魏は244～245年の2次にわたり、將軍毋丘儉を派遣して高句麗に侵攻する。諸軍歩騎万人を監督して玄菟郡を出る。そのいっぽう句麗王(高句麗)の宮(位宮)は、歩騎2万人を率い、軍を沸流水のほとりに進めた。

245年の黄幢の「仮授」によって、魏と倭の軍事同盟が締結されたことになる。親魏倭王の冊封体制よりもより強力に、倭は魏の東方戦略に軍事的にもくみこまれたのだった。

高句麗は、玄菟郡、遼東郡さらには楽浪郡との戦争の過程で、領域を拡大する。3世紀には集安

の国内城に遷都するが、玄菟郡の高句麗京城を修復して居城とする。4世紀後半には山城を築き、攻撃・防御施設とする。土城を修築するとともに、山城という堅固な城郭を築いた。

246（正始7）年に、馬韓の臣潰沽国が中心となって帯方郡に攻撃した〔武田1997〕。その戦いにおいて、帯方郡太守弓恆と楽浪太守劉茂は軍を率いて伐ち、弓恆は戦死するが、二郡は、ついに韓を滅ぼした。

黄幢とともに、卑弥呼に五尺刀が与えられた。黒塚古墳や椿井大塚山古墳では大量の武器が副葬されている。そして滋賀雪野山古墳、奈良黒塚古墳、京都椿井大塚山古墳、京都妙見山古墳、兵庫西求女塚、大分石塚山古墳などの小札革綴冑は魏から将来されたものである。

魏の帯方太守弓遵、張政等の遣使は、巡狩や出行・鹵簿の隊列をなし、文人・技術者などをふくんでいた。魏から倭への下賜品の一覧にふくまれていないが、五尺刀とともに小札革綴甲冑類が贈与されたのであろう。遼陽の漢魏の棒台子屯墓や上王家村晋墓の出行図のたぐいであろう。

**貢物と四海** 東夷伝に引用された「東漸于海，西被于流沙」は「朔南暨聲，訖于四海」とつづく。東夷、東海の倭国からの使いにたして、「汝所在踰遠，乃遣使貢獻，是汝之忠孝，我甚哀汝。今以汝為親魏倭王，假金印紫綬，裝封付帶方太守假授汝」と、蕃国、四海の境界領域からの使いは礼にかなった。

239（景初3）年の魏への貢物は、男生口4人、女生口6人、斑布2匹2丈で、絳地交龍錦5匹・絳地縹粟罽10張・蒨絳50匹・紺青50匹、紺地句文錦3匹、細班華罽5張・白絹50匹・金8両・五尺刀2口・銅鏡100枚・真珠鉛丹各50斤が返礼であった。

240（正始元）年に、魏から金・帛、錦、罽、刀、鏡、采物を賜う。243（正始4）年の貢物は、生口、倭錦、絳青縑、緜衣、丹、木付、短弓、矢であった。貢ぎもののなかに、倭の特産物があった。生口はまた格別なものであった。

東夷の諸国は、軍事的に服属するか、朝貢関係か、魏の国際的秩序の中にくみこまれた。

陳寿が『三国志』を編纂し、「天下方万里」の観念で東夷伝を記述されたのは、西晋という統一国家が成立し、その時代に編纂されたからにほかならない。

貢ぎもののなかに、倭の特産物があった。生口はまた格別なものであった。

東夷の諸国は、軍事的に服属するか、朝貢関係か、魏の国際的秩序の中にくみこまれた。蕃国からは「朝見」と特産物の「貢物」が義務であった。「汝好物」として銅鏡が贈与された。

陳寿が『三国志』を編纂し、「天下方万里」の観念で東夷伝を記述されたのは、西晋という統一国家が成立し、その時代に編纂されたからにほかならない。

## 東夷諸国の葬制と礼

東夷伝には、3世紀を中心とした各地の墓制について簡明に記述されている。

夫餘 其死，夏月皆用冰。殺人殉葬，多數。厚葬，有槨無棺。今夫餘庫有玉璧，珪，瓚數代之物，傳世以為寶，耆老言先代之所賜也。

高句麗 厚葬，金銀財幣，盡於送死，積石為封，列種松柏。

東沃沮 其葬作大木槨，長十餘丈，開一頭作戶。新死者皆假埋之，才使覆形，皮肉盡，乃取骨置槨中。舉家皆共一槨，刻木如生形，隨死者為數。又有瓦（金歷），置米其中，編

縣之於榔戸邊。

韓 其葬有榔無棺，不知乘牛馬，牛馬盡於送死。

弁辰 以大鳥羽送死，其意欲使死者飛揚。

倭 其死，有棺無榔，封土作冢。始死停喪十餘日，當時不食肉，喪主哭泣，他人就歌舞飲酒。已葬，舉家詣水中澡浴，以如練沐。卑彌呼以死，大作冢，徑百餘步，殉葬者奴婢百餘人。

3世紀を中心として、遼東郡・楽浪郡・帯方郡は塹室墳，公孫氏の遼陽付近は石榔墳と塹室墳で、官人層と在地層によるちがいはある。東夷伝の棺榔の構造，陳寿の認識はさまざまで，墓葬觀念にもちがいがあある。

棺榔制度は階層制度を表象する。東夷諸国における棺榔の構造，有無は身分制度，国家的階級制度をおしはかる尺度でもあった。夫餘と韓は有榔無棺で，倭は有棺無榔であった。夫餘では漢制の木榔墓が王都の帽兒山墳墓群で見つかっている。老河深墓群では木棺墓であるが，榔室にあたる墓壙はつくられている。韓では木棺・木榔墓が発達している。夫餘・韓のいずれも単榔墓である。楽浪郡，帯方郡，遼東郡の墓制（木榔墓・塹室墓）とことなる。

夫餘・東沃沮・濊・韓に土壙墓，木棺墓，木榔墓がある。韓には周溝墓のような低平な封土墳もあるが，基本的に墳丘・高塚をつくらない。高句麗は積石塚（封石），倭は方形周溝墓，四隅突出墓，前方後円墳などの封土（塚）がつくられる。東夷伝諸国にあって，封石，封土をもつ高句麗積石塚と倭の前方後円墳は東北アジアのなかで特異な存在で，陳寿も特筆している。

夫餘や高句麗は厚葬で，金銀，金銅製品が副葬されている。夫餘ではとくに玉璧という中原で至上の宝物を副葬することが特記されている。

夫餘と倭に殉葬（殉人，殉馬）の習俗は夫餘や倭に存在した。卑彌呼の墓の造営における「殉葬者奴婢百餘人」という記述も信憑性がある。弁韓・辰韓ではのちの加耶・新羅の時代になっても殉葬の制がのこる。

卑彌呼の死と墓の描写には臨場感がある。「徑百餘歩」の「冢」である。1尺23.8cm，1歩6尺とすると100歩は142.8mである。百余歩は，箸墓古墳の後円部径（約157m）に相当する。正始8年（247），塞曹掾史張政は邪馬台国に遣わされ，詔書と黄幢を難升米に授けた。その翌年卑彌呼の死と造墓を実見したといわれる。そして蕃国の倭には「籩豆（高杯）」を用いた習俗があった。東夷伝序文の「俎豆之象」や「礼」が倭国に存在したのだった。帯方郡から邪馬台国への万二千里，それは蕃国辺境の倭に至る道は、『三国志』東夷伝の歴史空間であった。

本稿は，共同研究『三国志』魏書東夷伝の国際環境とともに，「夫餘の考古学的研究」（平成12年度の特定期域研究「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」（考古学班代表春成秀爾）の成果による。



---

参考文献

---

- 山田孝雄 1922「匈奴国考－古代東国文化の中心」『考古学雑誌』12-8・10・11・12
- 李文信 1946「吉林市附近之史迹及遺物」(『歴史与考古』1946-1)
- 李文信 1947「遼陽北園壁画古墓記略」(『国立瀋陽博物院籌備委員会滙刊』第1期,『李文信考古文集』遼寧人民出版社, 1992)
- 康家興 1955「吉林省江北土城子附近古文化遺址及石棺墓」(『考古通説』1955-1)
- 孫守道 1960「“匈奴西岔溝文化”古墓群の発見」(『考古』1960-8.9)
- 近藤義郎・春成秀爾 1967「埴輪の起源」(『考古学研究』13-3)
- 顧頡剛 1963『史林雜識』中華書局
- 松本清張 1968『古代史疑』中央公論社
- 佐伯有清 1972『研究史戦後の邪馬台国』吉川弘文館
- 三品彰英 1973「古代祭政と穀霊信仰」(『三品彰英論文』5, 平凡社)
- 松本清張・鈴木武樹 1975「日本古代学の魅力」(『東アジアの古代文化』1975 早春)
- 三上次男 1976『古代東北アジア史研究』吉川弘文館
- 吉林省文物工作隊后崗組 1981「鍍金青銅飛馬牌飾」(『東北師大学報』1981-2)
- 宗述 1982「通榆県興隆山公社鮮卑墓葬出土文物」(『東北師範大学学報』1982-4)
- 董学增 1982「吉林東团山原始, 漢, 高句麗, 渤海諸文化遺存調査簡報」(『博物館研究』1982 創刊号)
- 李殿福 1983「漢代夫余文化芻」(『北方文物』3)
- 田耘 1984「西岔溝古墳群族属問題分析」(『黒龍江文物叢刊』1984-1)
- 吉林市博物館 1985「吉林市泡子沿前山遺址和墓葬」(『考古』1985-6)
- 劉景文・龐志国 1986「吉林榆樹老河深墓葬群族属探討」(『北方文物』1986-1)
- 龐志国・宋玉彬 1991「吉林九台市石拉山, 関馬山西团山分化墓地」(『考古』1991-4)
- 田廣生 1987「通榆出土金馬牌飾」(『文物』1987-3)
- 吉林市博物館 1987「吉林永吉楊屯大海猛遺址」(『考古学集刊』1987-5)
- 田村晃一 1987「新夫餘考」(『青山考古』5)
- 吉林市博物館 1988「吉林帽兒山漢代木槨墓」(『遼海文物』1988-2)
- 武田幸男 1989『高句麗史と東アジア』岩波書店
- 劉景文 1991「吉林市帽兒山古墓群」(『中国考古学年鑑 1991』文物出版社)
- 孫仁杰 1993「高句麗串墓の考察与研究」(『高句麗研究文集』延辺大学出版社)
- 武田幸男 1995・1997「三韓社会における辰王と臣智」(『朝鮮文化研究』2・3)。
- 菊池俊彦 1995『北東アジア古代文化の研究』北海道大学図書刊行会
- 武田幸男 1997「朝鮮古代から新羅・渤海へ」(『世界の歴史』6, 中央公論社)
- 宮川渉 1998「生産基盤と尺度論」(『古代学研究』142)
- 成正鏞 1998「錦江流域原三国時代土器について」(『原三国時代文化の地域性と変動』第29回韓国考古学全国大会)
- 李南夷 2000『龍院洞古墳群』(『公州大学校博物館学術叢書』00-03)
- 東潮 2001「倭と栄山江流域－倭韓の前方後円墳をめぐって」(『朝鮮学報』179)
- 吉林省文物考古研究所 2003「吉林長白県干溝子墓地発掘簡報」(『考古』2003-8)
- ホンチュン 2008「南揚州長峴5地区住宅建設敷地遺跡」(『季刊韓国の考古学』8)
- 京畿道博物館 1999『坡州舟月里遺蹟』(『京畿道博物館遺蹟調査報告』1)
- 京畿道博物館 2006『坡州六溪土城試掘調査報告書』
- 呉建煥・郭鍾喆 1989「金海平野についての考古学的研究 (I) 地形環境・遺蹟」(『古代研究』2)
- 崔鍾圭 1989「金海期貝塚・立地について」(『古代研究』2)
- 釜山大学校博物館 1998『金海鳳凰臺遺蹟』釜山大学校博物館研究叢書 23
- 徐始男 1998「鳳凰台遺蹟の性格」(『金海鳳凰臺遺蹟』(『釜山大学校博物館研究叢書』23)
- 申熙權 2002「風納洞土城発掘調査成果と意義」(『風納土城』ソウル歴史博物館)
- 渡辺信一郎 2003『中国古代の王権と天下秩序－日中比較史の視点から』校倉書房
- 朴淳發 2001『漢城百済の誕生』(木下亘・山本孝文訳 2003『百済国家形成過程の研究－漢城百済の考古学』六一書房)
- 吉林省文物考古研究所 2003「吉林省長白県干溝子墓地発掘簡報」(『考古』2003-8)



---

鈴木勉・河内國平編 2006 『復元七支刀－古代東アジアの鉄・象嵌・文字－』 雄山閣

東潮 2008 「百済の製鉄技術と七支刀」(『王権と武器と信仰』 同成社)

岸本直文 2008 「メスリ山古墳と祭政分権王政」(『メスリ山古墳の研究』 大阪市立大学考古学研究報告第3冊)

(徳島大学総合科学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2008年10月31日受理, 2009年1月19日審査終了)

表6 老河深墓の墓壇と副葬品

墓 M	墓壇						棺			葬式	同穴 男女 合葬	異穴 男女 合葬	装身具		
	方向	長	幅	高	底部長	底部幅	長	幅	高				金銅牌	耳飾	
														金	銀
56	263	328	145	54	323	125				仰直			4	2	
105	265	380	115	80	345	80				仰直		F106	7	2	
2	324	142	100							仰直					
103	270	280	144	95	250	120				仰直		○		2	
41	270	320	172	80	290	162				仰直	○			○2	
115	270	310	163	110	280	115				仰直				金銅2	
11	275	380	170	150	340	315	85	30		仰直		○	1		
124	90	360	165	117	295	126				仰直		○	2	2	
97	265	315	240	65	300	220				仰直	○		3	2	
33	275	343	231	160	310	210	117	45		仰直			○3		
98	265	225	100	30	215	100				仰直			○	1	
54	280	323	153	130	317	142				仰直				1	
66	275	276	130	70	268	123	245	82	30	仰直					
67	268	345	120	115	300	100				仰直		○		○	
102	245	267	135	100	238	73				仰直				1	2
113	270	300	136	80	270	125				仰直				1	○
13	270	360	180	45	340	170	233	80	30	仰直		M14		1	
57	263	320	140	65	305	140				仰直				1	
111	265	295	123	110	240	84				仰直		○		2	
116	270	315	158	118	295	105	235	72	18	仰直				2	
55	262	335	139	136	295	130				仰直				2	
110	270	270	135	60	220	90				仰直				2	
75	270	320	180	120	285	143				仰直				2	
120	90	340	135	110	295	115				仰直		○		2	
106	265	310	170	120	270	114	230	70	30	仰直		M105		2	
74	270	290	128	50	274	120				仰直				2	
32	265	318	185	70	290	130								○	
128	275	305	110	98	270	85				仰直				○	
69	268	345	95	110	285	95				仰直		○		○	
77	250	275	130	95	262	120	254	75	25	仰直				○	
127	265	300	130	80	265	86				仰直		F128		○	
27	270	265	110	15	110	90						○		○	
65	250	245	95	108	240	100	240	84	25	仰直				○	
93	85	320	120	120	250	96				仰直				○	
94	270	285	117	30	260	100				仰直				○	
1	275	340	245	139	275	90	257	80	53	仰直		○		○2	
15	270	345	178	165	290	120	270	90	20	仰直		○		金銅1	
58	267	290	159	57	245	130				仰直					2
125	90	290	155	85	210	75				仰直					2
14	270	355	185	50	305	173	240	80	24	仰直		F13			2
104	270	320	175	100	270	125	250	70	10	仰直		○			2
92	270	240	115	77	220	98				仰直					2○
76	262	300	100	80	240	100				仰直					銅2
78	97	340	200	50	250	200				仰直					
25	75	390	187	155	260	60	240	120	60	仰直					
122	85	340	135	105	285	105				仰直		○			
109	250	290	160	120	216	69				仰直					
112	260	305	155	75	235	80				仰直					
101	290	251	118	95	200	80				仰直					
10	250	260	110	57	230	100				仰直					
53	253	252	108	110	248	92				仰直					

装身具			曲棒 帶鉤	銅鏡	武器					農具		工具		砥石	瑪瑙	
指環					劍 銅木柄	刀	鑕頭 刀	矛	鏃	鍬	鋤	鎌	鑿			錐
金	銀	銅														
			1	1	1	○	○	○	13	1	1	1		1	78	
					1	○	○2	○	11				1		3	
		○3	1		1			○	22	1					3	
					1	○	○	○	3	1			1			
		○3			1	○	○		2	1		1		1	59	
					1		○	○	1		1				○	
							○									
							○						2			
				1			○2	○	5	1	1	1	1		43	
○						○										
															3	
			1				○	○						1	○	
		○	1				○		○						○	
				1			○	○	7					1	8	
							○						1		170	
						○									2	
	○2	○5					○								16	
							○				1					
	○					○									86	
	○						○						1			
		2				○				1			1		114	
		○													26	
		○														
						○									150	
							○			3	1			1	39	
									2						2	
○		○				○2			3		1				12	
	銀					○									44	
		○							○						8	
						○	○	○	○						5	
									2		○	○			○	
									2						6	
															20	
															○	
○5	○5	○3				○2	○								269	
							○4	○	14	1	1	1		1	48	
		6				○	○		○	1				1	39	
		○				○									2	
		○4				○	○	○	4	1	1	1	1	1	3	
						○									22	
		○					○			1				1	34	
		2													6	
	○						○		2						2	
	○7														103	
	銀2								3				1			
		3													3	
		4				○	○					2		1	4	
		4					○4								2	
		○				○				1			1	1	○	
		○				○							1		12	



墓 M	墓壙						棺			葬式	同穴 男女 合葬	異穴 男女 合葬	裝身具		
	方向	長	幅	高	底部長	底部幅	長	幅	高				金銅牌	耳飾	
														金	銀
18	285	405	160	165	255	110	239	110		仰直		○			
84	280	270	120	80	257	103				仰直					
6	80	255	146	105	210	68	200	60	45	仰直		○			
7	275	280	185	150	240	160	230	74	43						
4	85	310	150	148	290	100				仰直		○			
81	270	292	130	65	240	85				仰直					
29	265	240	145	125	200	120				仰直					
47	270	238	113	76	193	65				仰直					
52	270	260	107	60	240	94				仰直					
63	272	252	132	100	240	114				仰直					
64	250	300	176	90	265	142	234	74	30	仰直					
44	273	325	155	157	295	130				仰直					
36	265	240	155	125	230	110	200	100	25	仰直					
30	89	270	135	58	240	75				仰直		F39			
42	280	275	140	112	245	124	227	62	15	仰直					
71	270	225	105	125	200	95	195	85	14	仰直					
119	90	335	121	84	227	88				仰直					
17	280	405	170	169	275	135	255	115		仰直		○			
9	252	226	85	31	213	65				仰直		○			
19	270	330	165	70	308	137				仰直					
34	280	291	130	104	280	114				仰直					
99	260	290	120	65	280	90				仰直					
39	90	250	100	25	230	80				仰直		M30			
46	323	147	49	300	120					仰直					
107	230	335	140	68	300	120				仰直		F108			
85	77	195	123	63	155	104				仰直					
86	273	217	88	60	198	74				仰直					
121	265	280	137	90	251	134				仰直		○			
72	288	280	130	100	250	90				仰直					
20	270	200	88	47	180	65									
23	270	312	170	110	283	160				仰直					
82	255	270	122	160	190	90	200	90		仰直		F70			
126	260	325	150	80	270	107				仰直		M127			
45	255	245	135	105	242	125				仰直					
26	270	265	110	55	110	90				仰直		○			
48	275	316	142	145	250	88	250	88	18	仰直		○			
22	272	257	175	124	227	66				仰直					
49	275	256	155	140	222	140	204	85	15	仰直		○			
60	70	225	110	140	225	110	140	75		仰直					
8	275	300	197	115	285	178				仰直					
89	245	285	160	85	280	140				仰直					
96	270	272	145	192	245	133				仰直					
51	250	363	200	135	334	160	250	85	30	仰直					
5	80	230	135	138	142	65	140	60	48	仰直		○			
40	270	280	180	90	240	104				仰直					
62	280	170	90	110	170	90				仰直					
12	270	260	75	96	244	65				仰直					
50	250	318	180	100	235	80	227	78		仰直					
16	270	320	175	130	250	100				仰直		○			
91	60	354	115	80	320	110				仰直					
3	85	300	150	150	276	120				仰直		○			

装身具			曲棒 帶鉤	銅鏡	武器					農具		工具		砥石	瑪瑙	
指環					劍 銅木柄	刀	鑕頭 刀	矛	鏃	鏝	鋤	鎌	鑿			錐
金	銀	銅														
		○				○									4	
		○				○									15	
		○					3	○	4		1			1	○	
		○					○		3						3	
		○													3	
		○													42	
		○3													8	
		○骨													8	
						○	○							1		
						○	○								5	
						○	○								5	
						○	○								21	
						○	○									
						○			2							
						○			2							
						○			3	1						
						○			4	1					2	
						○			10	1	1	1				
						○			○	1	1	1		1		
						○			○							
						○			○							
						○				1	1					
						○									3	
						○									○	
						○									○	
						○										
						○2	○3				1					
						○2			5					1		
						○2			6	1	1	1				
						○2			○							
						○2							1			
						○3	○2		5		1				5	
							○		2				○	1		
							○		5	1					○	
							○			1	1	1		2		
							○			1		1				
							○								2	
							○								5	
							○								5	
							○								○	
							○								○	
								○								
									2	1						
									5						15	
									○	1					○	
									○				1			
									○							
									○							
										1	1					
													1			
															2	

墓 M	墓壙						棺			葬式	同穴 男女 合葬	異穴 男女 合葬	装身具		
	方向	長	幅	高	底部長	底部幅	長	幅	高				金銅牌	耳飾	
														金	銀
21	265	318	105	42	220	125				仰直					
73	250	245	110	60	225	100				仰直					
83	274	197	100	62	175	83				仰直					
123	90	325	125	110	270	77				仰直		○			
88	252	320	78	70	205	58				仰直					
28	255	275	80	100	246	75				仰直		○			
37	250	264	160	123	252	93				仰直					
108	230	300	153	80	260	110				仰直		M107			
61	265	235	90	170	240	100	238	96	43	仰直					
59	90	157	62	108	148	58	145	50	18	仰直					
31	270	330	270	110	315	257				仰直					
70	270	280	100	140	240	75				仰直		M82			
79	260	240	97	158	220	72				仰直					
95	270	300	87	78	220	78				仰直					
114	270	317	159	90	280	100				仰直					
24	270	283	145	80	260	120				仰直					
35	276	285	130	120	253	100				仰直					
38	269	301	147	90	237	81				仰直					
43	275	245	143	80	185	93				仰直					
68	260	270	120	84	245	90				仰直					
80	267	215	112	51	195	96				仰直					
87	255	240	83	80	214	73				仰直					
90	50	210	90	133	190	76				仰直					
100	265	315	150	65	300	147				仰直					
117	90	250	125	120	240	115				仰直		○			
118	90	300	120	83	208	74				仰直		○			
129	280	297	75	65	245	70				仰直					
													5	24	

表7 金海亀旨路墓群一時期別一

墓	時期	墓壙			木棺			土器									
		長	幅	高	長	幅	高	高杯	短頸壺	牛角把手壺	爐形土器	鉢形器台	鉢形器台	軟質甕	把手付鉢	その他	
亀旨路16	木棺墓	2C	260	115	63	173	35	38									
31	木棺墓		281	110	70	225	55										
39	木棺墓		265	91	45	195	43	28									
40	木棺墓		288	99	67	203	65										
45	木棺墓		258	110	63	188	57	30									
7	木棺墓	2C 初葉	245	110	68	195	50	20		1							小甕1
11	木棺墓		270	97	52	225	53	38									小甕2、牛角
	木棺墓																把手壺1
12	木棺墓		273	120	49	213	66	38									牛角把手壺1
	木棺墓																小形壺1
23	木棺墓		273	110	90	214	45	24									
25	木棺墓		285	138	52	215	58	28		1							牛角把手壺2
47	木棺墓		157	110	72	123	45	30									小甕1
48	木棺墓		204	72	30												
10	木棺墓		270	110	58	192	60	35									
17	木棺墓	175	65	12	122	41			1							小甕1	





墓		時期	墓壙			木棺			土器								その他
			長	幅	高	長	幅	高	高杯	短頸壺	牛角把手壺	爐形土器	爐形器台	鉢形器台	軟質甕	把手付鉢	
46	木槨墓	3C第2	243	138	22					2							
51	木槨墓	四半期	140	157	20					1		2					
21	木槨墓	3C第3	330	220	30					2		3					
28	木槨墓	四半期	343	200	22				2	4		5					
38	木槨墓		395	350	45					4		3					
18	木槨墓	3C第3	390	245	36					5					1		
27	木槨墓	四半期	290	135	22							1					
1	木槨墓	4C第1	340	190	25					7		1	2			1	
13	木槨墓	四半期	380	160	16					4			1				
24	木槨墓		305	173	14					6			2		1		
2	木槨墓	4C第2	365	185	5								2		1		長頸壺1
4	木槨墓	四半期	350	170	56					6			2		1		
14	木槨墓		310	150	34					2							
44	木槨墓		120	125	12					4							
6	木槨墓	4C第3	355	155	32				1	9			3		1		大形鉢1
9	木槨墓	四半期	385	215	18				2	16			7				
26	木槨墓		290	135	21				2	3				1		1	
30	木槨墓		312	98	21					4						1	
34	木槨墓		313	142	25				3	3							軟質器台
36	木槨墓		170	102	14				2	3							
5	木槨墓	4C第4	440	215	16								1				
15	木槨墓	四半期	327	130	16					5			4		2		
19	木槨墓		300	110	13					1							
33	木槨墓		330	133	38				4	7			1	2	3		軟質盥
35	木槨墓		345	150	41				2	7			2		1		
41	木槨墓		290	113	21				2	6			1	2	1	1	
3	木槨墓	不明	300	150	15					1							
8	木槨墓		140	220	10												
20	木槨墓		90	70	12												
22	木槨墓		130	90	13												
29	木槨墓		155	74	17												
32	木槨墓		120	94	10					1							
37	木槨墓		240	108	22												
43	木槨墓		305	153	19					1							盒形土器1
49	木槨墓		134	63	10					2							
50	木槨墓		155	60	20												
52	木槨墓		130	65	35												
53	木槨墓		160	90	15												
大成洞27	木槨墓	2C	275	100	48	230	65			1	3						
大成洞28	木槨墓		155	60	26	145											
大成洞29	木槨墓	3C	960	560	130	640	320			41		1	5		3		両耳短頸壺
大成洞45	木槨墓	3C	750	475	85	565	340			6		5			1		
大成洞52	木槨墓	3C	370	340	143					13		1					

鉄器											砥石	玉			その他
剣	太刀	刀子	矛	鏃	冑	斧	鑄造 未鏃	タビ	鎌	鑿		その他	琉璃	水晶	
		1			1										
						1									
2					1						鑿形鉄器1				漆器2
		1		74	2	2					鉄槍1, 鉄環1, 刀子形 鉄器1, 鉄鎚1	○	○		
		1		53		3	2	1	1		石突1			2	
		1				1									
										1		1			
			1	22		2				1	1				
		1								1					
						1				1					
2		3		2		1				1	二枝槍1, 鉄鎚2	○	○		紡錘車1
		1													
										1					
														1	
		1	1			3					1	○			
					1	3					石突1				
						1									
		1			1	3				1					
	鑽頭1	2	1			3				1	鉄鉈1, 鏃形2				管玉2
															紡錘車1
															紡錘車1
	鑽頭2	1		3	1	2									管玉6
												○			
1			1	1		1				1					
												丸玉			
	3	2		304		8				1	5	板状鉄斧43, 鉈1, 釣 針3, 鉈2		勾玉1, 切子玉1	銅鍍1, 金 銅片
	鑽頭1		4	24		1						槍4, 鋤2, 棒状鉄斧3			
1	1			14											勾玉1

墓	時期	墓壙			木棺			土器								その他		
		長	幅	高	長	幅	高	高杯	短頸壺	牛角把手壺	爐形土器	鉢形器台	鉢形器台	軟質甕	把手付鉢			
大成洞53	木槨墓	2C	225	100	132	190	40				3							
周辺Ⅰ-11	木槨墓	3C	305	155	31	220	105			1								把手壺1
周辺Ⅰ-12	木槨墓	2C	155	100	12					1								長頸壺1
周辺Ⅰ-13	木槨墓	2C	260	110	91	195	55			2	3							巾着壺1
周辺Ⅱ-26	木槨墓	2C	260	123	48	240	115				3							
周辺Ⅱ-29	木槨墓	2C	135	92	65	91	48									2		
周辺Ⅲ-3	木槨墓	2C	231	80	22	220	65			2								
周辺Ⅴ-1	木槨墓		245	95	40	250	40	28		1								
周辺Ⅴ-2	木槨墓		250	88	37	210	55	37										
周辺Ⅴ-3	木槨墓		245	120	80	210	55	36		1	3							
周辺Ⅴ-4	木槨墓		310	125	86	212	52	28		1								
周辺Ⅴ-6	木槨墓		325	93	40	240	55											
周辺Ⅴ-8	木槨墓		253	104	78	196	45	33										
周辺Ⅴ-10	木槨墓		266	95	65	197	56	28										両瘤付甕1
周辺Ⅴ-11	木槨墓		270	115	63	215	55	18		1	2							袋壺2
周辺Ⅴ-12	木槨墓		280	100	110	200	45	30										
周辺Ⅴ-13	木槨墓		250	85	50	180	50			3								
周辺Ⅴ-14	木槨墓		231	93	19	200	57	20		3								
周辺Ⅴ-15	木槨墓		275	100	75	220	50											
周辺Ⅴ-16	木槨墓		275	80	75	205	50											
周辺Ⅴ-17	木槨墓		235	99	42	216	48											
周辺Ⅴ-18	木槨墓		255	101	44	195	52				1							長胴甕1
周辺Ⅴ-19	木槨墓		243	90	23	198	56											
周辺Ⅴ-22	木槨墓		210	77	16													
大成洞60	木槨墓		258	118	89						2							袋壺1
大成洞63	木槨墓		274	97	40	198	55											小甕2
大成洞64	木槨墓		215	87	54	162	40											
大成洞66	木槨墓		230	90	114	161	50											
大成洞67	木槨墓		236	110	40	185	53			1								小甕1
周辺Ⅴ-9	木槨墓		328	152	20				1	5			1	1	1			広口小壺1
周辺Ⅴ-23	木槨墓		170	156	15													
周辺Ⅴ-25	木槨墓		250	120	9													両耳短頸壺1
周辺Ⅴ-27	木槨墓		277	130	10				1	1								
周辺Ⅴ-28	木槨墓		340	120	23				6	2								筒形器台1, 壺





## The Cultural Environment in the Dongyizhuan in the Sanguozhi

AZUMA Ushio

At the beginning of the Dongyizhuan (“Accounts of the Eastern Barbarians”) section of the “Sanguozhi” (“History of the Three Kingdoms”), there is the Tribute of Yu chapter in the Shangshu and there is a description of the system of nine regions (jiu fu) in the “Zhouli.” Established under this concept of tianxia (all under Heaven), Wei subjugated the Gongsun clan and governed the Nangnang and Daebang commanderies. Wei also subjugated Koguryo, and conquered the area up to the Yellow Sea. It is said that matters concerning the countries of the eastern barbarians were recorded as a reward, and this was how the existence of li (rites) in the countries of the surrounding barbarians became known. An examination of the positional relationships between the countries of the eastern barbarians and the Wei capital, distances, and area, shows that the Dongyizhuan, including the Wajinden, was written based on the tianxia concept. The Gishiwajinden is based on the notion of the five regions with tributes made by Luoyang to Nangnang, a distance of 5,000 li, and the 12,000 li from the Daebang commandery to the country of Yamatai is based on the notion of the nine regions in the “Zhouli.” They were described based on the concept of a smaller tianxia where geographical perception from the capital is substituted by distance from commanderies. The author proposes new interpretations for the “acquisition of iron” from Byeonhan in the section on Han (Korea), the trade (nanbeishidi) mentioned in the Gishiwajinden, and ensigns on the basis of the distribution of characteristic types found in archaeological sites and artifacts in the area of the eastern barbarian countries. The author suggests that there are graves affiliated to the kings of Wa and graves affiliated to the kings of the local Yamatai in the area assumed to be the state of Yamatai, the capital of the kingdom of Wa. It was through the title Qinweiwowang (Wa ruler friendly to Wei), and the gifting of a gold seal and silver seal with purple ribbon and ensign, that Wei and Wa had a military alliance as well as a tributary relationship. In conclusion, the so-called Gishiwajinden was written within the context of international relations between the Three Kingdoms and the Gongsun clan (Yan) and the countries of the eastern barbarians.

Keywords: Tribute of Yu Chapter in the “Shangshu” (“Book of Documents”), Zhouli (“Rites of Zhou”), area, ensign, alliance between Wei and Wa

---